

2018年度事業の概要

1 調査と研究	30	国が実施する事業等についての調査・協力	53
飛鳥藤原京の発掘調査	30	●平城宮・京跡の整備	53
平城京の発掘調査	30	●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究	53
企画調整部の研究活動	31	●キトラ古墳に関する調査研究	53
文化遺産部の研究活動	32	現地説明会	54
●歴史研究室の調査と研究	32	2 研修・指導と教育	55
●建造物研究室の調査と研究	32	文化財担当者研修と指導	55
●景観研究室の調査と研究	33	京都大学（大学院）との連携教育	55
●遺跡整備研究室の調査と研究	33	奈良女子大学（大学院）との連携教育	55
埋蔵文化財センターの研究活動	34	奈良大学への教育協力	55
●保存修復科学研究室の調査と研究	34	3 展示と公開	57
●環境考古学研究室の調査と研究	34	飛鳥資料館の展示	57
●年輪年代学研究室の調査と研究	35	平城宮跡資料館の展示	57
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究	35	解説ボランティア事業	58
国際学術交流	36	図書資料・データベースの公開	58
●中国社会科学院考古研究所との共同研究	36	4 その他	59
●中国河南省文物考古研究院との共同研究	36	刊行物	59
●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究	36	人事異動	64
●大韓民国国立文化財研究所との共同研究	37	予算等	65
●西アジア諸国の文化財保存協力事業	37	職員一覧	66
●カンボジア 西トップ遺跡の調査と修復	37	客員研究員一覧	67
●ミャンマー考古・国立博物館局との 技術移転・人材育成事業	37		
●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流	38		
●中央研究院歴史語言研究所との研究交流	38		
海外からの主要訪問者一覧	39		
海外からの招へい者一覧	39		
奈文研研究者の海外渡航一覧	40		
公開講演会	42		
第122回公開講演会	42		
第123回公開講演会	43		
第10回東京講演会（有楽町朝日ホール）	43		
研究集会	44		
科学研究費等	45		
学会・研究会等の活動	52		

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥・藤原地区において2018年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡で3件、飛鳥地域で4件である。また、立会調査は8件である。以下、主要な調査成果について概要を記す。

藤原宮大極殿院の調査（第198次）は、大極殿院北門・北面回廊およびその南側の内庭部の構造・状況の解明を目的とし、大極殿院北部（1050㎡）を調査した。調査期間は5月28日から12月5日である。調査の結果、大極殿院北面回廊中央部分の礎石据付痕跡12間分を検出した。これにより北面回廊東西幅の総長が400尺に復元され、北面回廊南側柱列から大極殿北側柱列まで250尺となり、大極殿院が綿密な設計にもとづき造営されたことがあらためて裏付けられた。今回検出した北面回廊の柱間寸法は桁行14尺、梁行10尺であるが、藤原宮中軸線が通る中央間のみ桁行16尺に復元でき、ここを出入り口とした北門の存在が推定される。また、これまでの調査（第20・195次）で確認されていなかった北面回廊の北側柱筋を今回初めて検出し、北面回廊も複廊であることが確定した。大極殿院内庭部では礎敷を検出し、大極殿院北部でも南部と同様に礎を敷いて整備していたことがあきらかとなった。大極殿院造営期の遺構としては、北面回廊基壇裾部分で排水のための東西溝と、それに連続し回廊基壇土を掘り込む暗渠と開渠を検出した。回廊基壇造成後の内庭側の排水に苦慮したことをうかがわせる。このほか、これらにさかのぼる先行朱雀大路両側溝や藤原宮造営時の運河等を検出した。

水路改修にともなう藤原宮外周帯の調査（第197-4次）では、断定はしがたいものの、朱雀大路西側溝と先行朱雀大路西側溝の推定位置で、それぞれ南北溝を検出したほか、藤原宮造営期の井戸を検出した。道路拡幅にともなう藤原宮東南官衙地区の調査（第197-5次）では土坑等を検出した。

飛鳥地域では、大官大寺南方、および飛鳥寺北方（第197-1・2次）と東方（第197-6次）で発掘調査をおこなった。大官大寺南方では、昨年度より大官大寺から山田道までの南北約450mの地域の様相を解明するために、地下探査と試掘調査を併用した調査をおこなっている。今年度（第199次）は、昨年度（第196次）探査をおこなった範囲の南側約10000㎡を対象に、地中レーダー探査を実施した。試掘調査は、大官大寺の中軸線よりやや西側で、藤原京左京十一條四坊西北坪の十條大路南側溝想定位置（65.5㎡）を調査した。

試掘調査の結果、十條大路南側溝の想定位置から北に3m程度ずれた位置で東西溝を検出したほか、南北に並ぶ柱間寸法7尺の柱穴列を3基分検出した。また、調査区北側では、北へと下がる地形に土を盛って平坦に整地している。昨年度の調査でも、今回の調査区の南東で斜行溝を埋め立てた様子があきらかとなっており、藤原京や大官大寺の造営に関わる可能性が指摘されている。大官大寺南方では、藤原京や大官大寺の造営にともない起伏のある地形を大規模に整地し、建物等の施設を設けた可能性が指摘できる。

飛鳥寺北方の調査では、飛鳥坐神社にいたる東西参道周辺を中・近世に盛土で大規模に整地していることがあきらかとなった。また、飛鳥寺所用と考えられる金銅製の風鐸が出土し、堂塔の荘厳の様子を解明するための手がかりとなることが期待される。飛鳥寺東方の調査では、7世紀後半以降に飛鳥寺の寺域東部を大規模に盛土して整備したことを確認したほか、柱穴、石列等を検出した。

平城京の発掘調査

都城発掘調査部が平城地区において2018年度に実施した発掘調査は、平城宮跡で4件、平城京跡で8件、その他2件である。以下、主要な調査成果について概要を紹介する。

平城宮内では、昨年度からの継続による東院地区（第595次）を始めとし、内裏北外郭官衙（第599次）、東区朝堂院（第602次）、宮西北部（第608次）の調査をおこなった。

このうち、東院地区の調査（第595次）では、奈良時代の整地を3時期にわたって確認したほか、奈良時代に属する掘立柱建物5棟、掘立柱塀1条、石組溝2条、素掘溝11条、方形区画8基、階段1基、土坑2基、被熱痕跡5基等、多種多様な遺構を検出した。特に、方形区画とした遺構群は簡易な建物や被熱痕跡をともない、地上式竈跡と推定される。以前の調査で検出された井戸や溝と合わせ、場所により異なる機能を有する大規模な厨が、本調査区とその周辺に展開していた可能性が高まった。

また、東区朝堂院の調査（第602次）では、奈良時代前半の東門の基壇および柱穴、区画塀である掘立柱塀の柱穴を検出し、また奈良時代前半から踏襲した奈良時代後半の東門および築地塀の基壇をめぐり雨落溝、奈良時代後半の建物の建て替えにともなう凝灰岩の分布

域、奈良時代前半および後半における朝堂院内の礎敷舗装等を検出した。これにより、東門基壇の東西規模があきらかとなったほか、これまで不明であった平城宮の奈良時代前半の朝堂院東門を確認したのは重要な成果である。

平城京城では、左京一条二坊十五坪（第598次）、東大寺東塔院（第600次）、左京二条二坊十五坪（第601次）、興福寺旧境内（第603次・609次）、法華寺阿弥陀浄土院跡（第604次）、左京一条二坊十坪（第605次）、左京三条一坊十六坪（第606次）の調査をおこなった。

このうち、東大寺および奈良県立橿原考古学研究所と共同でおこなった東大寺東塔院の調査（第600次）では、南門、東門および廻廊の遺構を検出した。調査の結果、南門の奈良時代創建期の基壇の基礎部分を踏襲しつつ、それ以外の部分は鎌倉時代の再建期および改修期に大きく改変されたこと、創建期の廻廊が四面すべて複廊であったものが、再建期には基壇の内庭側を切り縮めたり、基壇上面に新たな積土を施したりする等して、南面廻廊のみ複廊、そのほかは単廊として改造されたことが各遺構の具体的な規模とともにあきらかとなった。

また、左京二条二坊十五坪の調査（第601次）では、奈良時代前半の大量の炭を含む大型土坑から今まで類例のない用途不明の「箱型土製品」が多数出土したほか、奈良時代後半～末頃の断面八角形の形状の柱を用いた総柱建物や、中世の濠状遺構を検出した。また、中世の土坑から「法花寺」等と墨書した板状木製品が出土した。中世の濠状遺構と江戸時代の絵図『法華寺村絵図』を比較すると、法華寺集落が中世に集村化し、濠・溝も備わって防御的な機能を高め、後代に再整備されて、江戸時代の絵図に見える景観になった経過が想定できるようになった。

上記のほか、平城宮・京城の北方において、住宅建設にともなう小規模な発掘調査（第607次・610次）を実施した。右京北辺北方の調査（第610次）では、右京北辺に隣接する京外において、奈良時代の整地の存在があきらかになった。

企画調整部の研究活動

企画調整部は、地方公共団体の文化財担当者に対する専門的な研修、研究所の調査研究成果や文化財に関する情報の発信、文化財情報の収集・発信システムの研究と情報内容の充実、国際的な文化財の調査や保護活用に関する協力・援助と学術交流あるいは研修、飛

鳥資料館・平城宮跡資料館等における研究成果の展示公開と普及活動といった事業を実施している。また、奈良文化財研究所がおこなう研究に関わる様々な事業について、全体的・総合的な企画としての調整、そして、事業成果の内外への情報発信や活用を担当している。

文化財担当者専門研修では、企画調整室が中心となって立案した年度ごとの計画にしたがって、遺跡や遺物をはじめとする文化財の調査や、その成果の整理と保存・活用に関する高度で専門的な研修を実施している。2018年度は、専門研修15課程を実施し、延べ211名が受講した。また、研修受講者に対するアンケート調査では、100%の受講者から、今回受講した研修が「有意義だった」あるいは「役に立った」との回答を得た。

文化財情報研究室がおこなっている文化財情報電子化の研究では、発掘調査報告書に関するデータベースとして、全国遺跡報告総覧の公開をおこなっており、極めて多くのアクセスを得ている。遺跡情報・遺構情報・遺物情報の収集管理や活用に関する情報収集は継続的に実施しており、各種データベースへのデータ入力・更新を日常的におこなっている。また、調査研究成果の電子化として、ガラス乾板・35mmスライドフィルム・建造物保存図等のデジタル化を進めている。

国際遺跡研究室が主管する文化財保護に資する国際協力には、①1993年から継続しておこなっているカンボジアとの共同研究事業、②文化庁受託事業である文化遺産国際協力拠点交流事業、③セインズベリー日本藝術研究所（イギリス）との研究交流、④ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施する研修への協力事業がある。

①では、西トップ遺跡を対象にした調査と修復を実施しており、現在は中央祠堂の解体にともない、基壇・仏像台座部の発掘等の調査を進め、多くの新たな知見を得ている。

②では、2018年度は、ミャンマーを相手国とし、ピュー文化の遺跡であるシュリクシェトラ遺跡やモーラマインの陶磁器の窯跡を題材に、考古学調査、遺物の実測、測量等の考古技術の移転を目的とした研修をおこなった。

③では、「曙光の時代 日本の考古学の連続と変革」展のドイツ語版図録の英語版刊行の準備を進め、2018年度末に刊行した。このほか、日本、イギリスで講演会、ワークショップを開いた。

④では、2018年度は、集団研修「考古遺跡の調査と保存・活用」（アジア太平洋諸国16か国から16名参加）、個別テーマ研修「博物館収蔵品の保存科学」（ア

フガニスタン、バングラデシュ、パキスタンから5名参加)、フィジーで開催された「文化遺産ワークショップ」に講師等を派遣した。

なお、このほかの国際共同研究としては、都城発掘調査部が中心となっておこなっている中国中国社会科学院考古研究所、河南省文物考古研究院、遼寧省文物考古研究院(以上、中国)との共同研究、国立文化財研究所(韓国)との共同研究、国立慶州文化財研究所(韓国)との発掘調査交流、中央研究院歴史語言研究所(台湾)との研究交流等がある。

平城宮跡資料館では、夏のこども展示として「たいけん! なぶんけん」を開催し、秋期特別展は「地下の正倉院展 荷札木簡をひもとく」をおこなった。また、冬期企画展は「発掘された平城 2017・2018」を実施したほか、2019年1月には新春ミニ展示として「平城京の亥」を開催した。このほか、本庁舎開庁にあたり、エントランス展示について企画・実施した。

写真室では、研究所内の各文化財記録写真の撮影や、写真データの保管管理をおこなっている。また、写真記録の高精度・効率化を目的に様々な撮影手法の開発もおこなっている。さらに近年では、各地の地方公共団体での埋蔵文化財写真の研修会等に講師として出席しているほか、都城発掘調査部がおこなう中国との共同調査に室員が参加している。

文化遺産部の研究活動

文化遺産部は、歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室を置き、それぞれが、「書跡資料・歴史資料」、「歴史的建造物・伝統的建造物群」、「文化的景観」、「遺跡・庭園」について、専門的かつ総合的な調査研究をおこなっている。各研究室における調査研究の成果は、文化財の指定・登録・選定やその後の保存と活用に関する方策等、国の文化財保護行政にも大きく資するものとなっている。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、日本を代表し、世界文化遺産に登録されるような古寺社が所蔵する書跡資料・歴史資料について、奈良を中心として、継続的な調査研究をおこなっている。また、古都の旧家等に伝来した歴史資料についても調査研究をしている。

2018年度は、薬師寺・仁和寺・唐招提寺・当麻寺・三佛寺・法華寺・東大寺や、奈良関係の旧家等が所蔵する歴史資料・書跡資料調査をおこなった。

薬師寺調査では、東京大学史料編纂所と連携研究「薬師寺文書の調査研究」の協定を結んだ。そして第1函～第11函の調書原本校正・目録原稿作成作業をおこなった。その成果として2019年3月に、当研究所と東京大学史料編纂所との共編で、『薬師寺文書目録』第1巻(奈良文化財研究所史料第93冊・東京大学史料編纂所研究成果報告2018-1)を公刊した。

仁和寺の調査では、御経蔵聖教第83函～第87函の調書原本校正・写真撮影を実施した。また、御経蔵第150函中世文書について、釈文を詳細に検討し、原本校正をおこなった。

唐招提寺の調査においては、宝蔵に所在する聖教第17函の調書作成、念仏会函・掛け軸の整理作業と、聖教第7函～第8函の写真撮影をおこなった。

当麻寺が所蔵する未整理の経典を調査し、その全体像の把握に努めた。また、三佛寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、近世文書第7函の調書作成・経典の整理作業をおこなった。また法華寺所蔵の近世法華寺村絵図の調査・写真撮影をおこなった。また、金峯山寺関係の個人蔵の歴史資料について調査を実施し、調書作成・写真撮影を進めた。

水室神社宮司の大宮家所蔵文書につき、奈良市教育委員会と連携研究「大宮家文書の共同研究」の協定を結んだ。函文書の調書を作成し、写真撮影を進めた。

さらには、東大寺所蔵の新修東大寺文書聖教・興福寺関係の個人所蔵資料について、科学研究費補助金も充当して調査・写真撮影を実施した。

その他、調査協力の依頼を受けて、石山寺文化財調査・東大寺貴重書調査・文化庁による仁和寺聖教調査等に協力した。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では、歴史的建造物、伝統的建造物群に関する調査研究をおこなうことにより、わが国の文化財建造物の保存・修復、活用に資する基礎データの蓄積を継続的におこなっている。また、古代建築の保存と復原に資するため、古代建築の構造・技法の調査研究を、現存建物のみならず、修理等の際に保存された古材、発掘遺構・遺物等を研究対象として進めている。以下2018年度におこなった調査研究内容を紹介する。

古代建築に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を進めており、2018年度は、金堂の部材について報告書にすべく、補足調査、執筆、編集作業をおこなった。

2017年度・2018年度事業として、岡山県津山市から、津山市城西伝統的建造物調査業務を受託した。旧津山城下町西部のかつての町人地と寺町について、2018年

度は個別建物等の調査をおこない、伝統的建造物群としての保存に向けての方策を提案し、報告書を刊行した。

2018年度事業として、長野県塩尻市から、塩尻市奈良井伝統的建造物群保存地区内にある旧中村家住宅の建造物調査業務を受託した。現地調査および資料調査をおこない、当該建築の建物内に残る諸痕跡から、かつての宿場町での経済活動を良く示す建築であることを明確にし、報告書を刊行した。

2018・2019年度事業として、和歌山県湯浅町から、町内の重要建造物の調査業務を受託した。湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区内にある5件の調査をおこない、なかでも、江戸時代の主屋および江戸時代から近代にかけての醸造施設を良く残す加納屋については詳細な調査をおこなった。2019年度に報告書を刊行する予定である。

2018・2019年度事業として、日本綿業倶楽部から、重要文化財綿業会館の保存活用計画改訂にともなう検討業務を受託し、2019年4月に施行された改正文化財保護法に則った保存活用計画に改訂すべく、現地調査および保存活用方策を検討し、2019年度には、改訂計画を策定する予定である。

この他、各地で実施されている文化財建造物保存・史跡整備事業等について指導・助言をおこなっている。

●景観研究室の調査と研究

景観研究室では、文化的景観を主な対象として、その概念および保存・活用のための基礎的・応用的な調査研究に取り組んでいる。また、文化的景観保護に係る基礎的情報の収集・整理・検討・公開を進めつつ、文化的景観の具体的事例に関する取組として、地方公共団体からの受託研究等を通じて、保護措置の諸問題について検討を重ねている。

2018年度は、文化的景観研究集会（第10回）を「風景の足跡—考古学からの文化的景観再考—」をテーマとして11月18日に当研究所大会議室において開催し、報告・ディスカッション・ポスターセッションをおこなった。報告では京都市の窯跡に関する調査研究をはじめ、葛飾柴又（東京都葛飾区）、五島列島（長崎県五島市）、宇治（京都府宇治市）における重要文化的景観の調査・保護の取組について、研究者や各市・区の担当者にそれぞれの経験や課題等を発表いただいた。その後、全国の市町村の文化財保護担当者や大学の研究者等とともに討論した。参加者は90名以上であった。また、前年度に開催した文化的景観研究集会（第9回）「地域らしさを支える土木」の報告書を刊行した。

その他、以前から当研究所ウェブサイトにおいて公開している日本全国の重要文化的景観選定地区の概要について、最新情報を追加した。

地方公共団体からの受託研究については、前年度に引き続いて京都市から調査研究を受託した。京都市の文化的景観について市域の調査研究を続けるとともに、「北山杉の林業景観」について、これまでおこなってきた民家・集落・林業施設等の現地調査、生業に関する住民へのヒアリング等の成果を取りまとめ、『京都中川の北山林業景観 調査報告書』を編集した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室では、遺跡等の整備と庭園について調査研究をおこなっている。

遺跡等の整備については国際的な動向も視野に入れながら、主として国内に所在する遺跡等の保存・活用およびそのための整備事業について、理念や計画、設計、技術に関する調査研究をおこなっている。

2018年度は、前年度おこなった遺跡整備・活用研究集会の報告書『史跡等を活かした地域づくり・観光振興』を刊行した。報告書では史跡等を地域づくりや観光振興に活かす取り組みを収録するとともに、公園でもある史跡の管理運営を民間事業者がおこなう事例や史跡の整備にガバメントクラウドファンディングの事業手法等を取り入れた事例等も紹介している。また、「史跡等の保存活用計画—歴史の重層性と価値の多様性—」をテーマとして遺跡整備・活用研究集会を12月21日に開催した。参加者約130名。近世城跡に立地する近代施設等については城跡の歴史的経緯を示す重要な要素等として位置づけられても史跡そのものの本質的価値を構成するものではないため、別の価値づけとして整理する必要があること等が認識された。

平城宮跡の活用に関しては、平城宮跡活用の実践的研究として特別名勝平城宮東院庭園において夜間の観月を意図した「東院庭園庭の宴」の開催を担当し、運営上での課題等を実感して、今後の活用計画に活かす経験を得た。

キトラ古墳整備関係では特別史跡キトラ古墳整備事業報告書の編集・出版した。また、整備事業の概要を示すパンフレット（韓国語・フランス語・スペイン語・イタリア語）の作成をおこなった。さらに、墳丘近くに壁画の残存状況を示す乾拓板が設置されているが、国営飛鳥歴史公園と共催で遺跡見学と乾拓板の活用をおこなう体験学習会を4回おこなった。

庭園の調査研究については、2016年度からの5ヵ年で庭園の歴史に関する研究（近世庭園）の中で、3

年目の2018年度は10月21日に「茶の文化と庭園」をテーマとした研究会を開催し、年度末にその内容を取りまとめた報告書を刊行した。研究会では近世庭園における茶室と茶屋の違いや、露地の定義について議論がなされ、回遊式庭園での喫茶の在り方を考えるには、茶の湯に限らない多様な茶のかたちがあることを念頭に検討する必要があることが確認された。

また、奈良市教育委員会との連携研究として進めている「奈良市における庭園の悉皆的調査」については、奈良県知事公舎の庭や春日大社の庭等の現地調査をおこない、報告書の編集作業を進めた。

さらに、森蘊旧蔵資料の整理を進め、目録を公開した。

そのほか、連携研究として名勝法華寺庭園の保存活用計画の策定に関わる研究をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターは、遺跡・調査技術研究室、環境考古学研究室、年代学研究室および保存修復科学研究室の4室からなり、文化財の調査、研究および保存に関する先進的な研究に取り組んでいる。これらの研究成果は、文化財担当者研修やワークショップを実施することで、広く普及がはかられている。また、国や地方公共団体の要請にもとづき専門的な助言や協力をおこなっている。2018年度の各研究室の活動内容は、以下のとおりである。

●保存修復科学研究室の調査と研究

文化財に関する基礎的・体系的な調査・研究および調査手法の研究・開発を推進するため、1) 考古遺物の保存処理法に関する調査研究、2) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究、3) 建造物の彩色に関する調査研究、4) 古墳壁画の恒久的保存に関する調査研究を実施している。

1) では①平城宮跡出土木製遺物の一時保管中の水質に関する基礎データの収集、②木製遺物の薬剤含浸速度を向上するための基礎実験、③埋蔵環境下にある金属製遺物の腐食に対して地盤環境がおよぼす影響についての基礎研究、④鉄製遺物に関する新規脱塩法の実験条件の検討、⑤古代寺院出土の建築金具の材質・技法調査、⑥高エネルギー X線CTを用いた滋賀県出土さし銭の銭文解析、⑦考古遺物の新たな材質調査法としてレーザーアブレーションICP-MSの適用可能性に関する検討、⑧考古遺物の分析方法の標準化を目指した取り組み、以上の調査・研究を中心に取り組

んだ。また、「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」をテーマとした研究集会を開催した。2) では①平城宮跡遺構展示館における環境調査、数値解析にもとづく遺構劣化の抑制試験の実施と検証、②大分市元町石仏の環境調査、③石材からの塩類除去法の検討、④高槻市ハニワ工場公園における環境調査と遺構の劣化状態調査による劣化原因の解明、塩析出に対する遺構展示館内の照明設備や換気の運用方法の影響の検討、⑤土壌カラム実験による埋蔵環境のモデル化、および埋蔵環境下における金属製遺物腐食のモデル化に関する研究、⑥石造文化財に多用される軟岩類の乾湿繰り返し風化に関する研究を実施した。3) では①平城宮跡復原大極殿において外界気象の実測調査と塗装の劣化状態調査をおこない、周辺環境が塗装の劣化におよぼす影響について検討した。4) では①ガランドヤ古墳1号墳において、装飾の劣化要因と考えられる石材表面での結露を抑制する環境制御法の検証、および同2号墳の温熱環境調査と保存環境の検討、②模擬古墳を用いた古墳石室内環境が金属製遺物の腐食におよぼす影響の検討、金属製遺物の古墳石室内での腐食挙動に関する検討、③宮崎市蓮ヶ池横穴群において、横穴がほられた岩盤表層の劣化状態調査および温熱環境調査をおこない、横穴の活用を可能とする保存環境とその運用方法について検討した。

受託事業として、2018年度 史跡ガランドヤ古墳における運用手法の検討および墳丘復元法検討業務(日田市)、松帆銅鐸・舌の調査研究(南あわじ市)、法隆寺若草伽藍跡西方の調査出土壁画片の調査(斑鳩町)、群馬県金井下新田遺跡出土ガラス製遺物の材質調査(群馬県)の4件を実施した。また、連携研究として、史跡妻木晩田遺跡・仙谷墳丘墓群の保存整備に係る環境調査(鳥取県)、木古内町幸連5遺跡出土石製品の分析(北海道)、史跡石清尾山古墳石棺および同質石材石棺の乾湿風化に対して周辺環境がおよぼす影響の検討(高松市)を実施した。

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する研究等業務(文化庁)ならびに特別史跡キトラ古墳保存・活用等調査業務(文化庁)および文化庁キトラ古墳壁画保存管理施設(キトラ古墳壁画体験館 四神の館内)の管理・運營業務(文化庁)において、壁画の劣化原因究明および修理のための材料調査、高松塚古墳石室石材の安定化対策、四神の館における壁画管理環境の調査と管理をおこなった。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室では、動物考古学を中心とした環

境考古学の調査研究を実施し、国内外の発掘調査や整理、報告書作成の協力および助言をおこなっている。

2018年度の発掘調査や整理、報告書作成としては、金井東裏遺跡や金井下新田遺跡（以上、群馬県）、前田耕地遺跡（東京都）、保美貝塚（愛知県）、藤原宮大極殿院、平城京右京一条二坊・二条二坊、法華寺（以上、奈良県）等の遺跡から出土した動物遺存体や骨角製品の調査・分析をおこなった。

東日本大震災の復興事業にともなう調査支援は、波怒棄館遺跡や台の下貝塚（以上、宮城県）、雲南遺跡や堂の前貝塚（以上、岩手県）の整理作業や報告書作成を継続的に進めた。雲南遺跡（縄文時代前～中期）ではマグロ属がもっとも多く出土し、哺乳類は少なかった。堂の前貝塚（縄文時代中～後期）ではマグロ属とともに、ニホンジカやイノシシも多く出土した。縄文時代前～中期に三陸海岸の貝塚ではマグロ属が集中的に出土することが知られていたが、それが中期後葉～後期初頭頃に変化する可能性を指摘することができた。

研究成果の発信として、日本動物考古学会や日本魚類学会、International Conference of Archaeozoology等の学会・研究会で発表をおこなった。日本動物考古学会では「東北地方における貝塚調査の現状」と題した口頭発表をおこない、復興事業にともなう沿岸部の発掘調査を含め、この10年間で急増した貝塚調査の成果と展望をまとめた。社会還元や普及事業としては、松阪市文化財センター（はにわ館）や東京医療保健大学等で講演をおこなった。

現生標本の収集と公開では、クロマグロやミナミマグロ、ハクチョウ等の標本作製するとともに、3次元計測による立体的な骨格図譜のWebサイトを拡充・更新した。

●年輪年代学研究室の調査と研究

年代学研究室では、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するべく、出土遺物、建造物、美術工芸品等、多岐にわたる木造文化財の年輪年代調査をおこなっている。また、標準年輪曲線の拡充による木造文化財の産地推定や、年輪年代学的手法による同一材の推定、マイクロフォーカスX線CTを用いた非破壊調査手法の活用等、年輪年代学に関する基礎研究や年輪年代学を応用した文化財の科学的分析手法の研究開発もおこなっている。

出土遺物の調査・研究では、大阪府近大山賀遺跡の方形周溝墓から出土した木棺材の年輪年代測定をおこない、弥生時代前期末から中期初頭の年代を得ること

ができた。また、京都府岡田国遺跡において出土した奈良時代中頃と考えられている井戸の井戸枿材について、京都府埋蔵文化財調査研究センターから受託し、伐採年代を推定すべく年輪年代調査をおこなった。岡田国遺跡は、恭仁京の範囲内と考えられているが、恭仁京内における年代測定事例は少なく、本受託調査・研究での成果は貴重な情報になり得ると期待される。年輪年代学的手法による同一材の推定では、平城第524次調査（法華寺旧境内隣接地）から出土した削屑木簡を年輪年代学的な視点から観察することで、同一材に由来する群に分類し、同一簡について検討することによって、これまで不明確であった削屑木簡の接合を新たに見出した。建造物・美術工芸品の調査・研究では、滋賀県鞭崎神社本殿の年輪年代測定、また、解体修理にともなう栃木県輪王寺三仏堂の馬頭観音坐像、阿弥陀如来坐像、千手観音坐像の年輪年代測定をおこなった。

このように、年輪年代調査・研究を通して、各種文化財に資する情報を提供することができた。弥生時代の方形周溝墓出土木棺材や、近世の建造物および仏像の年輪年代測定を実施したことにより、考古学、建築史学、美術史学等に大きく寄与すると考えられる。また、従来、主に年代測定の手段として使用されることの多かった年輪年代学を、同一材推定の視点から木簡へ応用し、接合する削屑木簡を見出すことができた点も、今年度の大きな特徴である。今後、古代史学への貢献が期待される等、年輪年代学による調査・研究が発展的に進展するものと考えられる。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室では、主に遺跡から得られる諸情報の研究およびその調査手法について検討をおこなっている。

2018年度は、以下の点について活動を進めた。

遺跡研究としては、従来から継続している古代の官衙遺跡の情報収集として遺構の収集と整理をおこなった。加えて、寺院・官衙における情報について追加をおこなった。これらの作業により抽出したデータをデータベースとして公開している。また、皇朝十二銭と銚帯金具についてのデータの収集もあわせておこなっている。

加えて、古代官衙・集落研究集会を開催し、研究報告資料『官衙・集落と大甕』および資料集『甕据付建物遺構集成』を刊行した。

また、考古資料および文献資料から見た過去の地震・火山災害に関する情報の収集とデータベース構

築・公開をおこない、発掘調査データからの災害痕跡データの抽出をおこなった。また、発掘調査現場における災害痕跡の調査、資料採取、分析、報告を通じて防災および減災に寄与する遺跡からの歴史的な情報の抽出を進めている。

調査手法の開発としては、SfM・MVS、RTIおよびLiDARを中心とした三次元計測手法の洗練化と対象の拡大を主眼とし、遺跡周辺地形の抽出、森林下における計測機器の移動経路の記録や微地形の確認、土器・瓦等の迅速で詳細な計測、微細資料の計測等をおこない、成果を得た。また、自治体等の依頼により、三次元計測のワークショップを日本各地で開催し、低コストで実用可能な技術について、その有効性と限界を考慮しつつ普及する活動をおこなっている。

また、多チャンネルによる探査機器の試用を進め、より迅速かつ高密度での遺跡の地下情報の取得を可能とする試験を奈良県内はじめ九州・中国地方でおこない、発掘調査や史跡整備の前提となる情報の取得をおこなった。

加えて、被災地への支援として、熊本県下の被災装飾古墳の三次元計測および探査をおこない、被害状況の基礎的な資料を作成した。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、中国、韓国、カンボジアの3カ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、ミャンマーに対して技術移転・人材育成に関する事業をおこなっている。また、イギリス、台湾の研究機関とも研究協力をおこなういっぽう、奈文研以外の期間がおこなう支援協力事業にも参加している。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

11月14日から12月15日にかけての1ヵ月間、中国社会科学院考古研究所の沈麗華氏を日本に招聘し、学術交流をおこなった。東大寺東塔院や平城宮東区朝堂院の発掘調査に参加し、古代の日中交流の拠点となった鴻臚館遺跡、大宰府遺跡を見学、12月11日には奈良文化財研究所において「鄴城遺跡北朝寺院の発見と研究」と題して講演会を開催した。

2月25日から3月27日の1ヵ月間、企画調整部写真室の栗山雅夫を中国社会科学院考古研究所に派遣し、学術交流を実施した。中国では、甘粛省の石窟寺院の見学、鄴城遺跡、漢魏洛陽城遺跡にそれぞれ一定

期間滞在し、現地の研究員との交流を深めた。最後には北京の本所において「日本考古学写真 歴史と技術」と題して講演をおこなった。

3月には中国河南省洛陽市にある中国社会科学院考古研究所の洛陽工作站に今井晃樹、岩戸晶子、石田由紀子、清野陽一と栗山を派遣し、北魏洛陽宮城の遺物整理と遺物調査を実施した。今回は出土した軒平瓦、鴟尾の実測図作成および写真撮影をおこなった。あわせて今後の遺物整理作業について先方と協議するとともに、洛陽宮城の発掘調査現場を視察した。

●中国河南省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と河南省文物考古研究院は、2015年3月19日締結の「友好共同研究議定書」第4条と「友好共同研究覚書」の関連規定にもとづき、鞏義市黄冶・白河唐三彩窯跡の考古学的研究を実施してきた。現在は両窯跡出土品の整理、調査・研究を共同で継続的に実施している。2016年度に『鞏義黄冶窯』中国語版報告書を刊行し、現在は日本語版の刊行にむけての作業を進めている。

2018年度は、共同研究第4期5ヵ年計画の4年目にあたる。2002年から2004年にかけて発掘調査した河南省鞏義市黄冶窯跡と2005年から2007年にかけて発掘調査した同市白河窯跡から出土した資料の整理作業を進め、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行にむけての作業をおこなった。あわせて、唐三彩関連資料の調査も実施した。2017年度における共同研究に関わる相互の交流は、下記のとおりである。

2018年11月19日から11月23日まで、河南省文物考古研究院は呂安勝、胡趙建、周潤山、馬俊才、蔣中華の5名の研究者を派遣し、奈良文化財研究所を訪れ、学術交流をおこなった。また、奈良・東京の博物館等を見学した。

2019年3月18日から3月22日まで、奈良文化財研究所は巽淳一郎、尾野善裕、神野恵、丹羽崇史、山藤正敏の5名の研究者を河南省文物研究院に派遣し、『鞏義黄冶窯』日本語版の刊行に関する協議をおこない、黄冶・白河唐三彩窯跡出土品の資料調査を実施した。また、西安を訪問し、耀州窯博物館にて黄堡唐三彩窯跡出土品等関連資料の調査をおこなった。

●中国遼寧省文物考古研究院との共同研究

奈良文化財研究所と遼寧省文物考古研究院は、2017年5月に取り交わした友好共同研究協定書にもとづき、「三燕文化出土遺物の研究」と題する共同研究を遂行している（組織改編により遼寧省文物考古研究所は、

2018年11月より遼寧省文物考古研究院となった)。2018年度は、6月11日から6月16日にかけて、呉炎亮所長、盧治萍副研究官、鄭宇館員、趙代盈館員の4名を招聘し、今後の共同研究の進め方に協議するとともに、日本の関連資料や遺跡、文化財の保存・活用状況等を視察した。12日には奈文研所員向けの講演会を開催し、呉炎亮所長に「半拉山積石塚及相関問題」、盧治萍氏に「馮素弗墓考古研究新進展」と題して最新の研究成果を報告していただいた。

奈文研からは、11月12日から17日にかけて、廣瀬寛、諫早直人、大澤正吾、栗山雅夫、小池伸彦の5名を遼寧省文物考古研究院に派遣し、大板営子墓地、喇嘛洞墓地、王子墳山墓群、十二台88M1号墓等から出土した土器、金属器の調査をおこなった。

また、2015年度に遼寧省文物考古研究所で実施した日中学術研究会「遼西地区東晋十六国時期都城文化研究学術検討会」の成果を学術論文集として刊行すべく、翻訳、編集作業を進めた。

●大韓民国国立文化財研究所との共同研究

奈良文化財研究所と大韓民国国立文化財研究所とは2005年12月に研究交流協定書、共同研究合意書、発掘調査交流合意書を更新し、これにもとづき「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」および相互派遣による発掘調査交流を実施している。

共同研究については、日韓双方の協議を経て設定した課題にもとづき、5回の派遣と5回の受入を実施した。また、2018年度は5ヵ年計画の3年目にあたるため、奈文研において中間成果発表会を実施し、日韓双方より10本の発表をおこなった。なお、研究成果は最終年度にとりまとめる予定である。

発掘調査交流については、奈文研より国立慶州文化財研究所へ研究員1名を派遣し、新羅関連遺跡等において共同発掘調査を実施した。派遣期間は約1ヵ月間であった。また、国立慶州文化財研究所から研究員1名を受入れ、都城発掘調査部（平城地区、飛鳥藤原地区）において共同発掘調査を実施した。受入期間は約2ヵ月間であった。

●西アジア諸国の文化財保存協力事業

当事業に関して近年は、西アジア・中央アジア諸国の文化遺産保護に関する会議への出席や、資料収集、中央アジア諸国における文化遺産保存修復事業への協力等、実行可能な範囲で事業を続けている。11月にはバーミヤーンの資料に関して京都大学で調査をおこない、12月13日にはシルクロード国際シンポジウ

ム「文化が紡ぐ道 敦煌・中央アジア・奈良」に、1月23・24日には、文化庁東アジア芸術家・文化人等交流・協力事業である国際シンポジウム・国際研究会「シルクロードを掘る」に出席し、中央アジアの研究者から直接の情報収集をおこなった。また、6月から7月にかけてマナーマ（バーレーン）で開催されたユネスコの第42回世界遺産委員会に研究員1名を派遣し、紛争と文化遺産の問題について資料・情報の収集に努めた。

●カンボジア 西トップ遺跡の調査と修復

当該事業では2002年から調査対象を、アンコール・トム内の西トップ遺跡に定め、調査を進めており、2012年からは修復活動を開始し、南祠堂が2015年に終了し、北祠堂尾が2017年に完成した。2018年からは中央祠堂の解体に着手し、2017年度中に屋蓋部の解体を終了した。2018年度当初からは躯体部の解体に着手し7月までに終了した。8月以降は基壇部の調査を開始し、基壇部上面の実測調査を進めるとともに、現状の砂岩基壇外装の内側に存在するラテライトによる前身基壇の調査をおこなった。10月から11月にかけて、基壇部西南コーナー部の砂岩基壇外装の解体をおこない、ラテライト基壇の詳細があきらかとなった。12月には国際調整委員会に出席し、25周年となる2018年は、遺跡の調査修復に対する貢献により、文化芸術大臣より所長がサハメトレイ勲章の授与を受けるとともに、国王の拝謁に栄に浴した。2019年3月には王立芸術大学の卒業生2名と同大学講師1名の招聘をおこなった。

●ミャンマー考古・国立博物館局との技術移転・人材育成事業

奈良文化財研究所は、2013年度から文化庁の文化遺産国際協力拠点交流事業を受託し、ミャンマー考古・国立博物館局と共同で考古分野の技術移転・人材育成をおこなっている。2018年度は、①陶磁器の調査研究方法と②考古遺跡の測量方法についての研修を、日本とミャンマーで実施した。7・8月にヤンゴン大学とダゴン大学の若手考古学者3名を招へいし、陶磁器を展示する際に必要となる一連の作業について研修をおこなった。翌年1月に、研究員3名を沿岸部のモーラミヤインに派遣し、ミャンマーの考古学者4名とともに窯跡および出土陶磁器の調査をおこない、技術移転をはかった。遺跡測量の研修は、10月にピーアの考古学フィールドスクールの講師3名を招へいして実施した。11月には研究員3名を同スクー

ルに派遣して遺跡測量の研修をおこない、同校の講師と学生34名が受講した。

●セインズベリー日本藝術研究所との研究交流

奈良文化財研究所と英国ノリッチに所在するセインズベリー日本藝術研究所 (Sainsbury Institute for the Studies of Japanese Arts and Culture) は、2015年12月に日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施することを目的に、共同研究の協定を締結した。2018年度の主な事業は、①『曙光の時代 日本の考古学の連続と変革』展解説図録の英語版刊行、②セインズベリー日本藝術研究所奈良講演会 (10月31日奈文研にて、サイモン・ケイナー氏「キリスト教の受容 (400-1000 AD) の際の北海周辺におけるシルクロードからの影響」スーザン・ウィットフィールド氏 “Faith Across the Seas: Changing Landscape of the Silk Road”)、③英国での一般向け講演 (11月22日ノリッチ The Great Hospitalにて、Shinya Shoda “How Buddhism changed the world at the east extreme end of the silk road”)、④英国でのワークショップでの研究発表 (11月23日セインズベリー日本藝術研究所にて、Shigeto Ishibashi “Early temples in Japan”, Tomomi Tamura “Glass beads trade between the East and West”) であった。

●中央研究院歴史語言研究所との研究交流

台湾・中央研究院歴史語言研究所と奈良文化財研究所は、木簡関連分野と考古分野での研究協力を進めている。木簡の分野では2018年度は、台北・奈良で各1回の共同研究会を開催し、研究情報を共有した。また、IIIF (トリプルアイエフ) 準拠による簡牘・木簡文字画像の連携検索に向けた具体的な検討をおこない、開発の方向性、役割分担、スケジュール等を確定した。

考古分野では、2019年2月に研究員2名が台北を訪問し、台湾出土陶磁器の調査をおこない、関連資料について故宮博物院所蔵品の調査もおこなうことができた。

第16回アメリカ織物学会シンポジウムへの参加、研究発表/科学研究費

●丹羽 崇史：モンゴル・韓国/ '18.9.18～9.25/モンゴル西北部における冶金関連遺跡の調査/科学研究費分担金

●山口 欧志：モンゴル/ '18.9.20～9.23/億歳交流基金助成国際シンポジウム「世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山と周辺」の聖なる景色」-課題と展望」への参加・発表/科学研究費分担金

●田村 朋美：モンゴル/ '18.9.23～9.28/モンゴル出土ガラス製遺物の調査/他機関負担

●マレス・エマニュエル：アメリカ/ '18.9.23～10.3/北米日本庭園協会主催の国際シンポジウムに参加/科学研究費

●杉山 洋：カンボジア/ '18.9.24～9.28/西トッパ遺跡の調査と修復/運営費交付金

●山藤 正敏：キルギス/ '18.9.24～10.8/キルギス共和国チューヌ渓谷西部の考古学調査/科学研究費

●高妻 洋成：モンゴル/ '18.9.26～9.29/文化遺産研究センターとの研究交流に関する打合せ/運営費交付金

●星野 安治：カザフスタン/ '18.10.2～10.10/カザフスタンにおける現代考古学調査研究における自然科学的方法の適用と応用/先方負担

●庄田 慎矢：韓国/ '18.10.6～10.8/研究集会、打合せ/科学研究費

●李 暉：中国/ '18.10.14～10.18/中国浙江省台州地区大工道具調査/科学研究費

●岩戸 晶子：韓国/ '18.10.17～10.21/韓国瓦学会での研究発表/渡航費：先方負担、滞在費：韓国瓦学会・科学研究費

●今井 晃樹：韓国/ '18.10.18～10.21/韓国瓦学会での研究発表および韓国古代寺院の調査/渡航費：先方負担、滞在費：韓国瓦学会・科学研究費

●加藤 真二：フランス/ '18.10.20～10.28/IPHにおける中国旧石器・細石器の調査/科学研究費

●中村 一郎：フィジー/ '18.10.23～10.29/ACCUユネスコ・アジア文化センター主催ワークショップ事前準備/先方負担

●杉山 洋：カンボジア/ '18.10.24～10.29/西トッパ遺跡の調査と修復/運営費交付金

●山藤 正敏：キルギス/ '18.10.25～11.8/キルギス共和国アク・ベシム遺跡の考古学調査/科学研究費分担金

●森本 晋：アメリカ/ '18.10.26～11.1/学会PNC2018に出席/他機関負担

●石橋 茂登：中国/ '18.10.27～11.1/吉林省集安所在の高句麗壁画墓の視察調査/受託

●金 旻貞：中国/ '18.10.27～11.1/吉林省集安所在の高句麗壁画墓の視察調査/受託

●玉田 芳英：中国/ '18.10.27～11.1/吉林省集安所在の高句麗壁画墓の視察調査/受託

●廣瀬 覚：中国/ '18.10.27～11.1/吉林省集安所在の高句麗壁画墓の視察調査/受託

●栗山 雅夫：中国/ '18.10.27～11.1/吉林省集安所在の高句麗壁画墓の視察調査/受託

●中島 義晴：韓国/ '18.10.29～11.2/韓国国立文化財研究所との共同研究/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●内田 和伸：韓国/ '18.10.29～11.2/韓国国立文化財研究所との共同研究/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●柳 成煜：韓国/ '18.11.1～11.3/韓国文化財保存学会参加/先方負担

●山口 欧志：インドネシア/ '18.11.3～11.16/インドネシアでの研究活動VISA取得手続きおよびインドネシア科学院(LIPI)との研究打合せ/他機関負担

●加藤 真二：中国/ '18.11.10～11.16/霊井関連遺跡出土品の調査/科学研究費

●小池 伸彦：中国/ '18.11.12～11.17/遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」(喇嘛洞遺跡、大板営子遺跡ほか出土遺物の調査、平成31年度共同研究・研究計画の協議)/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●廣瀬 覚：中国/ '18.11.12～11.17/遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」(喇嘛洞遺跡、大板営子遺跡ほか出土遺物の調査、平成31年度共同研究・研究計画の協議)/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●栗山 雅夫：中国/ '18.11.12～11.17/遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」(喇嘛洞遺跡、大板営子遺跡ほか出土遺物の調査、平成31年度共同研究・研究計画の協議)/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●大澤 正吾：中国/ '18.11.12～11.17/遼寧省文物考古研究院との国際共同研究「三燕文化出土遺物の研究」(喇嘛洞遺跡、大板営子遺跡ほか出土遺物の調査、平成31年度共同研究・研究計画の協議)/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●庄田 慎矢：オランダ・イギリス/ '18.11.20～11.26/研究打合せ・国際シンポジウム/先方負担・運営費交付金

●石橋 茂登：オランダ・イギリス/ '18.11.20～11.26/研究打合せ・国際シンポジウム/先方負担・運営費交付金

●田村 朋美：イギリス/ '18.11.21～11.25/国際シンポジウムに参加/先方負担

●李 暉：中国/ '18.11.22～11.29/中国浙江省台州地区大工道具調査/科学研究費

●影山 悦子：ミャンマー/ '18.11.23～12.1/測量研修の補助/受託

●森本 晋：ミャンマー/ '18.11.23～12.1/測量研修の講師/受託

●山藤 正敏：ミャンマー/ '18.11.23～12.1/測量研修の講師/受託

●島田 敏男：カンボジア/ '18.11.25～11.29/アンコール文化遺産保護に関する研究協力/運営費交付金

●大林 潤：カンボジア/ '18.11.25～11.30/西トッパ遺跡の建築学的調査/運営費交付金

●杉山 洋：カンボジア/ '18.11.25～12.6/西トッパ遺跡の調査と修復/運営費交付金

●佐藤 由似：カンボジア/ '18.12.3～12.9/西トッパ遺跡調査、プノンベン国立芸術大学/運営費交付金

●森本 晋：カンボジア/ '18.12.4～12.7/国際調整委員会出席、西トッパ遺跡の調査/運営費交付金

●田村 朋美：中国/ '18.12.7～12.10/国際シンポジウム(International Symposium on Ancient Glass along The Silk Road)に出席、研究発表/先方負担

●高田 祐一：韓国/ '18.12.10～12.13/日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●廣瀬 覚：韓国/ '18.12.10～12.13/日韓共同研究「日韓古墳・寺院の比較研究」にかかる調査/渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

●高妻 洋成：中国/ '18.12.13～12.16/雲崗石窟の保存に関する現地調査/先方負担

●森本 晋：フランス/ '18.12.14～12.19/計量基準資料の調査/運営費交付金

●佐藤 由似：カンボジア/ '18.12.17～12.25/西トッパ遺跡調査/運営費交付金

●庄田 慎矢：ドイツ・リトアニア/ '19.1.8～1.16/国際研究集会"Trans Eurasian millets and beans, language and genes"および"International Seminar on Archaeology of Central Asia"における研究発表/一部先方負担、科学研究費

●石橋 茂登：韓国/ '19.1.11～1.12/韓国所在の古墳壁画関連施設の視察調査/受託

●李 暉：韓国/ '19.1.11～1.14/科学研究費基盤研究B(古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質)研究会参加/科学研究費分担金

●高妻 洋成：韓国/ '19.1.11～1.14/韓国所在の類似古墳壁画の調査/受託

●荻山 琴美：韓国/ '19.1.11～1.14/韓国所在の古墳壁画関連施設の視察調査/受託

- 金 旻貞：韓国／'19.1.11～1.14／韓国所在の古墳壁画関連施設の視察調査／受託
- 畑野 吉則：台湾／'19.1.15～1.17／台湾中央研究院歴史語言研究所で文字検索共通DB構築の打合せ／科学研究費
- 馬場 基：台湾／'19.1.15～1.17／木簡・簡牘画像IIIF化に関する共同研究／科学研究費
- 高田 祐一：台湾／'19.1.15～1.17／台湾中央研究院歴史語言研究所で文字検索共通DB構築の打合せ／科学研究費
- 鈴木 智大：中国／'19.1.15～1.19／浙江省の古建築調査および資料収集／科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア／'19.1.15～1.19／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
- 森本 晋：ミャンマー／'19.1.15～1.22／窯跡・陶磁器の調査研修とワークショップ開催／受託
- 影山 悦子：ミャンマー／'19.1.15～1.22／窯跡・陶磁器の調査研修とワークショップ開催の補助／受託
- 佐藤 由似：ミャンマー／'19.1.15～1.22／窯跡・陶磁器の調査研修とワークショップ開催／受託
- 石橋 茂登：イタリア／'19.1.24～1.30／壁画の複製等による展示手法の調査／受託
- 西田 紀子：イタリア／'19.1.24～1.30／壁画の複製等による展示手法の調査／受託
- 中田 愛乃：イタリア／'19.1.24～1.30／壁画の複製等による展示手法の調査／受託
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.2.5～3.2／ポスト・アンコール期の調査／科学研究費
- 金田 明大：イタリア／'19.2.10～2.15／ARIADNE+ (Plus) キックオフミーティング参加／運営費交付金
- 高田 祐一：イタリア／'19.2.10～2.16／アリアドネプロジェクトに関する協議／科学研究費
- 森本 晋：台湾／'19.2.12～2.15／中央研究院での陶磁器に関する調査／運営費交付金
- 尾野 善裕：台湾／'19.2.12～2.15／中央研究院での陶磁器に関する調査／運営費交付金
- 加藤 真二：中国／'19.2.15～2.24／鄭州・済南・北京での研究成果報告、資料調査、研究打合せ／科学研究費
- 影山 悦子：ウズベキスタン／'19.2.17～2.23／イスラム以前の考古遺物の調査ほか／科学研究費、助成金
- 石田 由紀子：韓国／'19.2.18～2.22／慶州および扶余地域における6～8世紀の瓦の調査／渡航費：科学研究費、滞在費：先方負担
- 清野 陽一：韓国／'19.2.18～2.22／慶

州および扶余地域における6-8世紀の瓦の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

- 岩戸 晶子：韓国／'19.2.18～2.22／韓国古代寺院における出土瓦の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 小田 裕樹：韓国／'19.2.25～3.1／日韓共同研究の一環として①慶州出土唐三彩の調査、②百済地域出土時の調査、③韓国の食器・食事・食生活に関わる民俗調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 森川 実：韓国／'19.2.25～3.1／日韓共同研究の一環として①慶州出土唐三彩の調査、②百済地域出土時の調査、③韓国の食器・食事・食生活に関わる民俗調査／運営費交付金
- 松永 悦枝：韓国／'19.2.25～3.1／日韓共同研究の一環として①慶州出土唐三彩の調査、②百済地域出土時の調査、③韓国の食器・食事・食生活に関わる民俗調査／運営費交付金
- 桑田 訓也：台湾／'19.2.25～3.1／簡牘の調査、研究会での発表／先方負担
- 馬場 基：台湾／'19.2.25～3.1／簡牘史料等の調査／他機関科学研究費
- 栗山 雅夫：中国／'19.2.25～3.27／中国社会科学院考古研究所との学術交流／先方負担
- 浦 蓉子：中国／'19.2.26～3.3／中国田螺山遺跡の木製品調査／他機関科学研究費
- 畑野 吉則：中国／'19.3.4～3.12／中国甘肅省および湖南省出土簡牘の調査／科学研究費
- 浦 蓉子：中国／'19.3.4～3.12／中国甘肅省および湖南省出土簡牘の調査／科学研究費
- 佐藤 由似：カンボジア／'19.3.5～3.10／西トップ遺跡の調査と修復／科学研究費分担金
- 杉山 洋：カンボジア／'19.3.5～3.10／西トップ遺跡の調査と修復／運営費交付金
- 渡邊 晃宏：韓国／'19.3.12～3.14／韓国共同研究木簡等出土文字資料の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 桑田 訓也：韓国／'19.3.12～3.15／日韓共同研究木簡等出土文字資料の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 今井 晃樹：中国／'19.3.16～3.23／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 岩戸 晶子：中国／'19.3.16～3.24／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 石田 由紀子：中国／'19.3.16～3.24／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 清野 陽一：中国／'19.3.16～3.24／北魏洛陽宮城出土遺物の調査／運営費交付金
- 田村 朋美：モンゴル／'19.3.18～3.22

／モンゴル国出土ガラス製遺物の調査／科学研究費分担金

- 神野 恵：中国／'19.3.18～3.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 山藤 正敏：中国／'19.3.18～3.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 丹羽 崇史：中国／'19.3.18～3.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担
- 尾野 善裕：中国／'19.3.18～3.22／共同研究に関する協議、唐三彩の調査／渡航費：運営費交付金、滞在費：先方負担

公開講演会

第122回公開講演会

2018年6月16日

◆山本 祥隆「重層する基壇 一東大寺東塔院跡の発掘調査一」(トピック講演)

往時、東大寺は大仏殿の南東および南西に、それぞれ回廊で囲われた2基の七重塔を有していた。特に東塔院は、奈良時代の創建ののち平重衡の南都焼き討ちによる焼亡を経て鎌倉時代に再建され、塔・回廊とも2代の建物が存した。

近年、東大寺では境内整備事業の一環として奈良県立橿原考古学研究所・奈良文化財研究所とともに東塔院跡の発掘調査を進めている。2015・2016年度の調査では、鎌倉再建塔基壇の内部に奈良創建塔の基壇外装が良好な状態で遺存していることが判明し、両塔の基壇構造や建物初重規模等を究明した。本報告では、この発掘調査の成果について紹介した。

◆佐藤 由似「古代アンコール王朝の終焉～西トップ遺跡の調査成果～」

カンボジアのアンコール遺跡群のひとつ、アンコール・トム内に位置する西トップ遺跡において、奈良文化財研究所は2002年より調査を続けている。2011年以降から遂行している修復調査によって、上座仏教に関連する図像を有する彫刻類や、北祠堂地下からはレンガで構成された地下室状の遺構が発見された。このレンガ遺構からは被熱した金製品等が多く出土し、放射性炭素年代測定の結果、14世紀末から15世紀前半までに属することが判明した。1431年に滅亡したと言われるアンコール王朝の最末期にあたる様相を示すことを検討した。

◆福嶋 啓人「入浴の歴史と建築」

日本人にとって入浴の歴史は奥深く、入浴施設の形式は多種多様である。本発表では、まず古代中世の文献・絵画資料、現存・発掘遺構から、入浴施設の萌芽・定着期の形式を整理し、次に入浴文化の発展した江戸時代では、都市と地方での建築形式の相違、明治時代以降は建築材料の変化や著名な建築家の浴場建築等から、近代化の一端として入浴施設を捉えた。さらに、現代では入浴施設の建物としての再評価の潮流を報告した。以上のように、古代から現代までの入浴の歴史とともに、各時代の入浴施設の建築的変遷や変容について通観した。

第123回公開講演会

2018年11月10日

◆松村 恵司「鳥形の幢は八咫鳥か」

2016年に藤原宮の大極殿院南門の前から発見された7本の幢幡遺構。『続日本紀』大宝元年(701)の元日朝賀の記事によると、中央に「鳥形の幢」を、その左右に日・月像と四神旗を樹てたとある。弘仁14年(823)の『淳和天皇御即位記』には、「立八咫鳥日月形」とあり、鳥形の幢を八咫鳥とする説がこの頃から広まったようである。公開講演会ではこの八咫鳥説を検証した。

室町時代の『文安御即位調度図』は、鳥形幢を太陽の象徴である三本足の鳥とするが、記紀には八咫鳥を三本足とする記述は一切みられない。講演会では多角的な検討結果を紹介し、鳥形の幢は、日神である天照大神の子孫である「日の御子」を象徴し、皇位継承の正統性を誇示するために樹てられたと結論した。

◆高田 祐一「全国遺跡報告総覧と考古学ビッグデータの可能性」

考古学は、蓄積型の学問であり、過去の調査研究事例の蓄積が重要である。着実な文化財保護行政の推進によって、膨大な調査成果が報告されている。しかし情報が多すぎて探せないという情報爆発の弊害もでてきた。その解決策の一つとして、報告書のインデックスの機能を果たしうる全国遺跡報告総覧について現状と可能性を紹介した。全文検索機能、他の情報基盤とのデータ連携機能、自然言語処理技術を応用した機能等について解説した。全国遺跡報告総覧に登録されているデータは、考古学ビッグデータとして、今後大きな可能性を秘めていることを述べた。

◆山藤 正敏「シルクロード天山北路の東西交渉—アク・ベシム遺跡の調査成果から—」

紀元前後に成立したシルクロードは、紀元1千年紀のユーラシア大陸における文化交流に大きな役割を果たした。とくに中央アジアは東西世界の結節点に位置していることから、シルクロード交易において常に要衝を占めてきた。

本発表は、キルギス共和国北部を通過したシルクロード天山北路に着目して、同路上に位置する世界文化遺産アク・ベシム遺跡における近年の発掘調査の成果から、シルクロードにおける東西交渉の一端を紹介した。アク・ベシム遺跡には、文献学の研究成果により、7世紀に唐帝国の最西端の軍事拠点「碎葉鎮」が置かれていたことがわかっているが、これまで考古学調査により検証されてこなかった。しかし、2015年秋に東京文化財研究所が実施した同遺跡東半のラバト地区での発掘調査により、官衙的性格が推測される遺構・構築面と中国系瓦・長方磚が最下層から大量に出土し、ここに「碎葉鎮」が存在したことが示唆された。また少ないながらも出土した土器片の層位的・型式学的な分析結果により、ラバト地区最下層が7~8世紀に位置づけられる可能性が高いことから、考古学的観点からも「碎葉鎮」の存在が検証されつつある。今後は瓦・磚の分析を進めると同時に、アク・ベシム遺跡ラバト地区出土土器を周辺遺跡の出土土器と層位的・型式学的に比較することにより、唐帝国の西方への進出の様相をよりつまびらかにする必要がある。

第10回東京講演会(有楽町朝日ホール)

2018年10月13日

◆渡辺 晃宏「平城京の歴史的位置—遷都とその契機—」

藤原京への遷都から僅か16年で平城京に遷都した事情について、主として近年あきらかになってきた平城宮・京の実態にもとづいて、日本の都城の流れにおけるその歴史的な位置付けという視点から考えた。

従来ともすれば、大宝律令の施行を日本古代国家の完成と位置付け、8世紀はその衰退・変質過程として捉えることも多かった。確かに藤原京の時代は、当時の日本がめざした国のあり方が先鋭的に現れる場合が多い。しかし、それは完成を意味するのではなく、平城京の時代こそが、そこに軌道修正を施し、実態に見合ったものに造り替えていく、真の意味での日本の古代国家の建設過程であった。その点を、最新の発掘調査や文献史学の新しい研究成果にもとづき、法令や銭貨等都城以外の側面にも目

を配りつつあきらかにした。

また、平城京が、遷都当初から奈良京(ならのみやこ)と呼ばれていたことをあきらかにした木簡についても紹介した。

◆海野 聡「建物の移築にみる藤原京・平城京」

本発表では、建物の移築を通して、藤原京と平城京の遷都の一側面に光を当てた。建物の移築では大極殿・朱雀門の移築について言及した。また部材の再利用の例として、藤原宮東面大垣の掘立柱塀が平城宮第一次大極殿院の木樋に転用された例を取り上げ、建築部材の運搬という面を描き出した。

都城との関係性でみると、掘立柱塀の柱の再利用は遷都当時の材料のひっ迫した状況や臨機応変な対応を示している。いっぽうで大極殿は宮殿の心臓、朱雀門は顔にあたる建物であり、大量造営と短期間での遷都作業による材料不足という意味ではなく、建物そのものを移すことに権威を移すという意味を持っていたという側面を述べた。

◆大澤 正吾「平城宮幢旗遺構の発見—平城京遷都と儀式遺構の変化—」

1970年度の平城宮第69次調査の成果を再検討した結果、第一次大極殿院にともなう宝幢・四神旗を立てた遺構を発見することができた。大極殿の前面で3本柱を立てる横長の柱穴7基が横一列に並ぶこの幢旗遺構について、発見の経緯と詳細を説明し、宝幢・四神旗(幡)を立てる儀式が、701年(大宝元年)元日朝賀にともない藤原宮で成立し、奈良時代前期の平城宮において定型化を達成したという2つの画期を論じた。さらに、第一次大極殿院南門前で幢旗遺構の候補となる2つの遺構について説明し、今後の研究課題についても述べた。

◆今井 晃樹「平城宮の造営過程—長期にわたる建設事業—」

710年(和銅同3年)の平城遷都の年、大極殿の建物は影も形もなかった。その4年後、714年(和銅7年)に至って大極殿院と朱雀門がようやく完成する。しかし、このとき、平城宮を囲む大垣は朱雀門の両脇ができていたにすぎず、のこりは仮設の塀で囲まれており宮城門は見ると影もなかった。霊龜年間(715-717)以降、順次宮城門と築地大垣を造営していくが、すべての大垣が完成するのは天平年間(729-749)を待たねばならなかった。『続日本紀』の711年(和銅4年)の「宮垣未だ成らず」から実に20年以上もかかったのである。

これまで60年近い平城宮の発掘調査成果を総合的に検討して、平城宮の主要な建

物がどのような順序で造営されていったのかに主眼を置き、発掘調査による造営工事の前後関係をおもな根拠とし、屋根に葺かれた軒瓦の年代観を手掛かりに建物の造営順序を細かく分析していくことで、平城宮の具体的な造営過程をあきらかにした。

◆神野 恵「平城京を造る—朱雀門と佐伯門前の発掘事例から—」

平城宮周辺でおこなった最新の発掘調査事例から、平城京の造営工事の実態を具体的に述べた。平城宮いぎない館建設に先立つ調査では、朱雀門の前が広場になっていたことを確認し、広場の下層には都城造営時の鉄鍛冶工房が操業していたことを紹介した。また、佐伯門前にあたる奈良文化財研究所本庁舎建て替えにともなう事前の発掘調査結果では、大規模な河川付け替え工事の様子や、旧河川を運河として利用していた可能性が高いことを述べた。これら最新の調査事例から、平城京造営がきわめて大規模な土木工事をとまなうことや、高度な計画性のもとに遂行されたと論じた。

◆玉田 芳英「古代都市 藤原京の実態」

藤原京は高度に規格された都市であり、利用も進んでいたことを、発掘調査成果の詳細な検討をもとにあきらかにした。そのうえで、平城京への遷都の理由に関するこれまでの説について検証し、いずれもあたらないことを述べた。

藤原京の造営計画に関しては、『周礼』をあらためて検討した結果、実は藤原京と合致する点はほとんどないことを指摘した。即ち、藤原京の造営は『周礼』を参考にしたものではなく、別の思想にもとづいたものであることを示した。最後に、遷都の理由についても新たな見解を提示した。

研究集会

◆保存科学研究集会

2018年11月27日

産地推定に関する研究は、考古学の中でも重要なテーマの一つで、様々なアプローチによって、これまで多くの研究がおこなわれてきた。その一つに、金属製品の原料となる鉱石の産地を推定する方法として、鉛の同位体比を利用する方法が1960年代に提案された。日本でも、この手法は1970年代の終わりに導入され、これまで青銅製品やガラス製品等に適用され、膨大な量の研究成果が蓄積されている。そこで、2018年度は「同位体比分析と産地推定に関する最近の動向」と題して、これま

での長年にわたる日本での鉛同位体比分析に関する研究成果を振り返るとともに、海外からも第一線の研究者の方を迎え、研究集会を開催した。本研究集会では、近年欧米を中心に研究が進んでいるガラス製品の同位体比分析による産地推定についての研究成果や、日本国内の調査研究として、青銅製品やガラス小玉の産地推定について、計5件の口頭発表と、関連する分野から計8件のポスター発表をおこなった。ポスターセッションや、各口頭発表での質疑応答では活発な議論がおこなわれ、同位体比分析に関して学術的な交流を深める機会となった。(脇谷 草一郎)

◆古代官衙・集落研究集会(第22回)

2018年12月7～8日

2018年度は「官衙・集落と大甕」と題して研究集会を開催した。

研究報告は、小田裕樹「宮都における大甕」、川畑誠氏((公財)石川県埋蔵文化財センター)「北陸における官衙・集落と大甕」、田中広明氏((公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団)「古代官衙・集落と大甕」、木村泰彦氏(長岡京市教育委員会)「長岡京の甕据付建物と大甕」、木村理恵氏(奈良県立橿原考古学研究所)「大甕の生産と流通の変遷について」、三舟隆之氏(東京医療保健大学)「大甕を使う」の計6本である。発表終了後、西山良平氏(京都大学)の司会による総合討議をおこない、各地における大甕の様相と歴史的特質に関する活発な討議が交わされた。

参加者は、地方公共団体・大学関係者等計110名で、アンケートでは96%が有意義であったとの回答が寄せられた。なお、今回の研究集会の研究報告を2019年度に刊行する予定である。

このほか、2017年度に実施した研究集会の研究報告『地方官衙政庁域の変遷と特質』(報告編、資料編)を2018年12月に刊行した。(小田 裕樹)

◆遺跡整備・活用研究集会

2018年12月21日

「史跡等の保存活用計画—歴史の重層性と価値の多様性—」をテーマとして遺跡整備活用研究集会を開催した。発表者と内容は、基調報告として山下信一郎氏(文化庁文化財第二課)「史跡等保存活用計画について」、以下、事例報告として、佐藤隆氏(大阪市教育委員会)「特別史跡大坂城跡保存管理計画」、田上和彦氏(高岡市教育委員会)「高岡城跡保存活用計画」、大宮富善氏(寒河江市教育委員会)「史跡慈恩寺旧境内保存活用計画」、平野淳氏(大阪狭

山市教育委員会)「史跡狭山池とともに—1400年生き続ける文化遺産を守る—」、高橋知奈津(奈文研)「名勝法華寺庭園保存活用計画」であった。

総合討議をおこない、史跡と公園としての活用のあり方等についての情報を共有することができた。(内田 和伸)

◆中央アジア旧石器研究集会(第2回)

2019年1月17日

奈良文化財研究所で開催した中央アジアにおける近年の日本隊の旧石器調査成果を総括した研究集会。中央アジアにおいて重要な遺跡の多くが集中して分布する天山—パミール地域では、最近5年間に日本隊による発掘調査が多数実施され、多くの成果が得られつつある。その成果を報告して参加者で共有するとともに、それをふまえてユーラシア全体に共通する様相について討議をおこなった。

今回は、キルギスのクラマ遺跡(大沼克彦:国士館大学名誉教授)、カザフスタンのクズルアウス2遺跡(国武貞克:奈文研)、ウズベキスタンのアンギラク洞窟(西秋良宏:東大総合研究博物館教授)の発掘調査成果について報告があった。そして、ロシア、モンゴル、中国の事例紹介(加藤真二:奈文研)とあわせて、ユーラシア旧石器広域編年について討議をおこなった。

討議ではキルギス、カザフスタンで新たに発掘した小石刃 bladeletが卓越するEUP期の石器群の調査成果をふまえて、ウズベキスタンで提唱されているクルブラキアの編年を再検討するとともに、東方のアルタイ山地、ザバイカル地方、モンゴル高原、中国黒龍江省、古日本列島において共通する石器群を比較した。これらがほぼ同時期に発生している点をふまえて、広域的なホライズン設定の可能性を議論した。

本研究集会は、文部科学省科学研究費補助金17H05133(研究代表者:国武貞克)による成果の一部である。(国武貞克)

◆古代瓦研究会(第19回)

2019年2月2～3日

「8世紀の瓦づくりⅧ—一本づくり・一枚づくりの展開—」をテーマとして、奈文研平城宮跡資料館講堂においてシンポジウムを開催した。昨年度も同テーマで東日本を対象としたが、今年度は西日本を対象である。参加者は地方公共団体・大学・研究機関関係者等のべ203名である。2日は、北村圭弘氏(滋賀県文化財保護協会)が近江、藤田智子氏(京丹後市教育委員会)が山背、垣内拓郎氏(兵庫県まちづくり技術センター)が近畿地方北・西部、松尾佳子

氏（岡山県古代吉備文化財センター）が山陽地方、岡本治代氏（徳島県立博物館）が四国地方、3日は、谷崎仁美氏（龍谷大学文学部）が摂津・河内・和泉・紀伊、榊原博英氏（浜田市教育委員会）が山陰地方、山口亨氏（佐賀市教育委員会）が九州地方北部、金田一精氏（熊本城調査研究センター）が九州地方中・南部の状況を報告し、あわせて資料観察会をおこなった。また、岩戸晶子が大和の状況を紙上で報告した。3日午後には、石田由紀子の司会により総合討議をおこない、各地における軒瓦の一本づくり技法、軒平瓦・平瓦の一枚づくり技法の特徴、年代観、技術の系譜等とそれらの背景について活発な議論が交わされた。

なお、今回のシンポジウムの成果は、2021年度に刊行する予定である。

（清野 孝之）

科学研究費等

◆木簡等の研究資源オープンデータ化を通じた参加誘発型研究スキーム確立による知の展開

代表者・馬場 基 基盤研究 (S) 新規

本研究は、「木簡」を主たる対象として、参加誘発型スキームを確立し、そこで集積した知を用いて、研究を飛躍的に向上させることを目指すものである。

2018年度は、国際的な歴史的な文字の共通検索実現を目指して、奈文研・東京大学史料編纂所・国文学研究資料館・国立国語研究所・台湾中央研究院歴史語言研究所を中心に、具体的な内容を決定した。また、木簡関連総合データベース「木簡庫」に木簡情報をCSVファイルでダウンロードできる機能を追加し、オープンデータ化した。

このほか、文字に関する知識の集積作業を実施した。さらに、木簡調査者との情報共有のためのワークショップを開催した。

◆発掘遺構による古代寺院建築史の構築

代表者・箱崎和久 基盤研究 (A) 継続

発掘調査で検出した古代寺院の遺構を集成し、それを分析するというオーソドックスな手法で古代建築史を見直そうというのが研究の大きな目的である。それとともに、近年の研究によって、地方寺院間や官衙との関係から、瓦の生産体制や流通についてもあきらかになってきている。発掘遺構の分析とともに、瓦研究の成果を総合して古代寺院建築史を検討したいと考えている。

2018年度は、5ヵ年計画の4ヵ年目にあたり、発掘遺構の集成作業を終え、デー

タの整理と資料集作成に向けての作業を進めた。寺院の立地等により、平地寺院と山林寺院、村落内寺院等に分類するとともに、堂塔ごとのデータを集成しようと試みたが、平地寺院ではその分類が有効なものの、山林寺院や村落内寺院では難しい。分類基準をわかりやすくし、できるだけ明晰なデータ提供ができるよう模索中である。瓦研究の成果も、上記の成果とリンクできるように、集成と整理作業を進めている。瓦の同范関係等により、寺院造営の横のつながりが、堂塔の平面や造営技術に反映されているかどうかを検討していきたい。

◆平城宮・京跡出土木簡とその歴史環境のグローバル資源化

代表者・渡辺 晃宏 基盤研究 (A) 新規

日本最大の木簡蔵庫地である平城宮跡・平城京跡の発掘情報、文献資料、地理情報を資源化することで、日本の木簡を東アジア木簡学の構築に資する共有資源として、広く利用できるようにすることを目的とする研究である。

2018年度は4年計画の1年目で、(1)平城宮・京跡の発掘調査成果（遺構、および共伴遺物）を木簡データベース「木簡庫」（以下、「木簡庫」）にリンクさせるためのシステムの検討、(2)『平城宮編年史料集成（稿）』の確認・増補、および『平城京編年史料集成（稿）』作成に向けた資料収集、(3)平城宮・京の発掘調査成果にもとづく平城宮3D動画の試作、(4)「木簡庫」の研究文献目録拡充のための論文リスト作成と、平城宮・京に関する研究文献目録の収集、(5)奈文研と共同研究を進めている国立伽耶文化財研究所・国立扶余文化財研究所における出土木簡調査、奈文研の木簡研究とデジタルアーカイブの紹介、および今後のデータベース連携についての検討、等を実施した。

◆中国漢代の木槨・木棺材を用いた年輪年代学の確立と用材選択の意義

代表者・光谷 拓実 基盤研究 (B) 継続

過去5年間にわたって漢代の木槨・木棺材に多用されているスギ科のコウヨウザン（中国南部、台湾に生育分布し、日本のスギと同様、優良木材として多方面に使われる樹種）から計測収集したデータを用いて年輪パターン照合をおこなってきた結果、漢代では564年間分（BC6C～AD1C）と中世では241年間分（AD11C～14C）の2種類の暦年未確定の年輪パターンを作成することができた。今後、この年輪パターンは漢墓や中世墓の年代測定に応用されることになるであろう。2018年度は2種類の

年輪パターンの信頼性をさらに確実なものにするために、これまで収集してきた年輪データの見直しと一部再計測をおこなったほか、コウヨウザンの年輪試料にたびたび現れる不連続年輪が年輪パターン照合の際に障害となっている問題点についてもいろいろ検討したが、その有効な解決法は見いだせなかった。

漢代の木槨・木棺材の樹種の利用傾向については同定の結果、広葉樹のPhoebe属（クスノキ科）と針葉樹のコウヨウザン（スギ科）の2種類がほぼ大差なく利用されており、なかでも木槨材にはPhoebe属が優先的に使用されていることが明らかとなった。ただし、このPhoebe属は年輪年代学研究には不適であることが確認された。

◆東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南靈井遺跡出土品の徹底分析—

代表者・加藤 真二 基盤研究 (B) 海外継続

中国東北部（ハルビン・延吉）、山東地区（済南・臨沂）、フランス（パリ）等で関連遺跡出土の遺物を調査・観察した。これまでの調査研究の成果を、連携研究者（研究協力者）に執筆いただいた靈井遺跡出土の土器片の考古学的分析、石器の使用痕分析、残留澱粉粒分析、AMSによる分析・測定に関する論考とともに取りまとめ、研究成果報告書を編集執筆、刊行した（ISBN：978-4-909931-01-6）。中国北部における更新世後半から完新世初頭にかけての考古学的事象を考えるうえでの基礎的な研究となる。詳細は上記報告書を参照。

◆同一材推定による再積読と荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線の構築

代表者・星野 安治 基盤研究 (B) 継続

木簡を対象とした年輪年代学的な同一材推定および荷札木簡を用いた地域標準年輪曲線を構築することにより、木簡から考古資料としての新たな価値を引き出し、考古学・古代史学・年輪年代学が融合した研究を推進する。2018年度は、前年度に引き続き奈良文化財研究所都城発掘調査部平城第524次調査出土の木簡削屑を対象とした同一材推定を継続して進めた。その結果、木簡削屑に新たな接合関係が見出され、書かれた文字の判読や解釈に資する等の成果が得られた。これらの成果をまとめた論文が日本木簡学会の研究誌『木簡研究』に掲載されるとともに、朝日新聞『be on Saturday』で研究成果を紹介する等、社会還元もおこなった。

◆南都の未整理文書聖教にもとづく寺社とその周辺社会の調査研究

代表者・吉川 聡 基盤研究 (B) 新規

従来の科研の最終年度前年度申請をした結果、2018年度から標記研究課題で5年間の研究が認められた。本年度は、新修東大寺文書聖教の第86函～第90函の調査や、第86函・98函等の写真撮影を実施した。また明治初年の日記の一部を翻刻した。

さらに、東大寺中性院が所蔵する襖・屏風の下張り文書について、糊を剥がし調査する作業と、そこから見出した文書の検討を、研究分担者の横内裕人氏を中心となって実施した。

加えて、個人所蔵の興福寺関係資料について、悉皆的な整理・調査を実施した。また、奈良の旧家の個人蔵の資料について、研究協力者の協力の下で、古文書・絵画・民俗等について調査をおこなった。

◆松帆銅鐸発見を契機とする銅鐸論の再構築

代表者・難波 洋三 基盤研究 (B) 新規

2018年度の調査で、松帆出土の舌4と舌6が同範であることが判明し、7号銅鐸が兵庫県伊丹市中村銅鐸と同範である可能性が高くなった。また、銅鐸の鈕と舌に残る紐とその痕跡の検討から、銅鐸と舌のセット関係が銅鐸入手時から変わっていないと推定できた。これが正しければ、銅鐸と舌のセット関係と同範関係によって結びつく、2・4・7号銅鐸と舌2・4・7が同じ工人集団の製品となる。以上を含む調査研究成果の詳細は、2019年度初めに刊行予定の『季刊考古学』の松帆銅鐸特集号に掲載する予定である。また、11月に開催された保存科学研究集会で、前回の科研費等による、弥生時代と中国漢代の青銅器の鉛同位体比分析とICP分析の成果を発表した。

◆和同開珎の生産と流通をめぐる総合的研究

代表者・松村 恵司 基盤研究 (B) 新規

2017年度申請により、2018年度から研究計画の再構築が認められ、奈良文化財研究所の「地方官衙関係遺跡データベース」を利用して官衙関連遺跡の分布図を作成し、和同開珎出土遺跡分布図と比較対照する作業を継続した。また、『日本古代貨幣関係史料集稿－出土木簡編』の刊行に向けた編集作業をおこなうとともに、2016年に公開した「和同開珎出土遺跡データベース」に、研究代表者の和同開珎に関する主要論文を掲載し公開した。

2019年3月8・9日には、研究集会「和同開珎の生産と流通をめぐる諸問題」を開催し、和同開珎の在り地における流通、近江

国の銭貨流通、鑄銭司の発掘調査成果について、調査研究報告と討議をおこなった。

◆古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質

代表者・海野 聡 基盤研究 (B) 新規

2018年は研究初年度にあたり、研究体制を整え、日中韓の修理工事報告書や各種論文に記された図面類等の情報収集に努めた。

中国福建省・河南省・台湾の調査をおこない、東アジアの建築技術を比較するための情報を収集した。また2019年1月12日には韓国ソウル景福宮にて、日中韓の3カ国の造営体制に関する国際会議「古代東アジアの造営体制に関する学術会議」を開催した。各国の文献史料にもとづく研究状況の整理および今後の研究課題について、情報の共有をはかり、維持管理という概念による新たな建築史研究の可能性について討議した。また中国故宮にて、歴史的建造物の修理に際し、修理工事報告書の刊行における注意点や日本の状況を伝え、東アジアの木造遺産の修理に関する情報交換をおこなった。

◆カザフスタンにおける現生人類北回り拡散ルートの解明に関する国際共同研究の基盤強化

代表者・国武 貞克 国際共同研究強化 (B) 新規

アフリカで進化した現生人類がアジアにいたるまでの拡散ルートは、アラビア半島から海岸部を伝って東南アジアにいたる南回りルートと、中央アジアを経由してユーラシア北部を経由した北回りルートの2つが想定されている。このうち日本列島に大きな影響をおよぼした北回りルートの実態解明は先史考古学上の世界的な中心課題のひとつとなっており、そのカギを握るのが中央アジア西部の情報である。とくにユーラシア中央部で広大な範囲を占めるカザフスタンでは重要な遺跡の存在が予測されるものの組織的な調査が少なく実態が不明である。このため本研究課題では、カザフスタン共和国国立博物館およびカザフ国立大学と共同で、現生人類が中央アジアに到達して拡散した時期とみられる5～3万年前の遺跡を新規に発見して発掘調査を実施する。徹底した野外調査によりオリジナルな資料を新たに獲得することを目的としているが、2018年度新規に12月末に交付決定となったため野外調査を実施することができなかった。このため1月にカザフスタン2研究機関と協力機関である東大考古学研究室とともに、来年度から5か年にわたる具体的な野外調査計画について協議をおこ

なった。

◆律令制下の土器生産―須恵器・土師器群別分類の再構築

代表者・神野 恵 基盤研究 (C) 継続

2018年度は須恵器・土師器の胎土分析について、滋賀県立信楽窯業試験場の協力を得て、ガラスビード法による胎土分析のデータを追加し、これまでの分析データの検証と試料採取方法の違いによる誤差の有無等を確認した。また、岡山県寒風陶芸会館の協力を得て、須恵器の製作技法に関する基礎的データの収集と検証実験をおこなうとともに、須恵器製作に用いられた粘土の採掘場所の特定、成分分析等をおこない、古代の須恵器生産に用いられた粘土の採掘地点についての見通しを得ることができた。

◆奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦磚の基礎的研究

代表者・今井 見樹 基盤研究 (C) 継続

2018年度は科研の最終年度である。平城京の寺院出土の瓦磚について考古学的観察や分布状況を分析した。具体的には、興福寺、葉師寺、大安寺、東大寺、法華寺、西大寺、唐招提寺から出土した施釉瓦磚を整理し、各寺院出土の施釉瓦磚の特徴、寺院出土の時期的変遷等を考古学的に分析した。この成果は『奈良文化財研究所紀要2019』に掲載した。

施釉瓦磚の比較参考資料として、韓国新羅および百濟の出土資料の調査を実施した。韓国における施釉瓦磚の形態的特徴や使用方法の特徴等を把握することができた。

最終年度にあたり、これまで公表した研究発表および昨年度に実施した研究会の発表資料を文章化し報告書を作成した。

◆古代の灯火―先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究

代表者・深澤 芳樹 基盤研究 (C) 継続

本研究では、光を生みだす人工的なしくみを照明具と呼ぶ。現代にいたるまでその多くは、有機成分が酸化したときにおきる発光現象を利用してきた。樹木を燃やす松明等は、その例である。しかしこれは野外においては有効であっても、室内では燃焼の持続時間と発光量、それに管理の問題から、不適當であった。飛鳥時代以降日本列島にあらわれる、植物油料を燃料にして、灯心で発光させる灯火器は、この問題を解決したといえよう。

2018年度は、長野県浅間縄文ミュージアムと同黒曜石体験ミュージアムにおいて縄文研究者と検討し、大阪府住吉大社で神

社における火の意味について神職の意見をいただいた。

◆埋蔵環境下における金属製遺物の現地保存方法の開発

代表者・脇谷 草一郎 基盤研究 (C) 継続

本研究では、1) 遺跡地盤内部における熱・水分・物質(酸素)移動の数値解析から地盤内部の遺物埋蔵環境を推定するモデルの構築と、2) 土壌カラム中で金属試料の分極抵抗を測定することで、土壌の含水状態と酸化還元環境が金属の腐食挙動におよぼす影響を定量的に把握し、これらの結果から埋蔵環境下での金属製遺物の腐食速度のモデル化を試みた。2018年度は細粒土と粗粒土を用いたカラム実験を実施するとともに、地下水位と地下水中の溶存酸素濃度を実測しているフィールドを対象として、地盤内部の酸化還元環境のモデル化を試みた。その結果、地盤内部の気相酸素の移動、とりわけ排水過程の空気の引き込みによって地盤内部の酸素濃度は急増し、鉄の腐食が大きく促進される様子が認められた。また、これらの水分と酸素の移動を考慮したモデルから地下水中の溶存酸素濃度を推定した結果、実測値を概ね再現する結果を得た。

◆蛍光X線分析と鉛物組成分析による飛鳥藤原地域出土古代瓦の生産・供給体制の研究

代表者・清野 孝之 基盤研究 (C) 継続

本研究は、飛鳥藤原地区出土瓦と同範または深い関わりが推定される瓦について、理化学的分析(蛍光X線分析、鉛物組成分析)、考古学的調査をあわせておこない、その生産と供給の実態をあきらかにしようとするものである。研究期間の3年目にあたる2018年度は、藤原宮出土瓦と同範の愛知県春日井市高蔵寺瓦窯・勝川遺跡・川井薬師堂遺跡出土軒瓦(6233Ac)、奈良県大和郡山内山瓦窯・西田中瓦窯出土軒瓦(6281B、6641F)のほか、藤原宮式軒瓦の文様から影響を受けたとされる香川県東かがわ市白鳥廃寺出土軒瓦、徳島県吉野川市河辺寺跡・川鳥廃寺出土軒瓦等の調査をおこない、藤原宮所用瓦の生産の様相を把握するための手がかりを得た。

◆6世紀の埴輪生産からみた「部民制」の実証的研究—奈良盆地を中心に—

代表者・廣瀬 覚 基盤研究 (C) 継続

本研究は、律令国家成立以前の支配制度の一つであり、従来は文献史学を中心に研究がなされてきた「部民制」について、近

年、飛躍的に深化している埴輪生産組織の復元研究にもとづいて、考古学からその実態をあきらかにすることを目的とする。

3年目となる2018年度も、引き続き奈良盆地およびその周辺地域を対象に、5世紀後半から6世紀代にかけての埴輪の実見を鋭意進めた。その結果、奈良盆地の後期古墳の埴輪の系統識別、および製品の流通状況について、具体的な見通しを立てることができた。また、デジタルカメラを用いたSfM-MVS法による3次元計測での完形品の円筒埴輪の記録を試み、記録手段としての有効性を再確認した。

◆古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究

代表者・山崎 健 基盤研究 (C) 継続

本研究の目的は、遺跡から出土した食料残渣から、古代における食生活をあきらかにすることである。2018年度は、古墳時代～古代の遺跡から出土した動物遺存体を集成するとともに、哺乳類利用に関する研究を進めた。

研究成果については、近江貝塚研究会で「国家形成期における哺乳類利用」と題した口頭発表をおこない、松阪市文化財センター(はにわ館)の特別展『人とともに生きた馬』では「骨からみた古代の馬」と題した講演をおこなうとともに、展示図録にも論文を寄稿した。

◆Sr同位体比分析による日本出土「ナトロンガラス」の産地に関する考古学的研究

代表者・田村 朋美 基盤研究 (C) 継続

本研究では、日本出土のガラス製遺物のSr同位体比分析を実施し、これまで特定することのできなかった生産地の特定を目指すものである。2018年度は、インド～東南アジアで生産されたと考えられるカリガラスおよび高アルミナソーダガラスのSr同位体比を測定した。その結果、これらのガラスは昨年度に実施した地中海産のナトロンガラスとは全く異なる値を示した。特にカリガラス(Group PI)は今回調査した資料の中でもっとも高い値を示した。筆者らは製品の流通状況等からGroup PIのカリガラスについてインド産の可能性があると考えているが、インドのガンジス川流域の土壌は高いSr同位体比をもつことが知られており、関連性が注目される。

◆展示施設を拠点とする地域住民参加型の歴史的建造物の調査

代表者・西田 紀子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、展示施設を拠点に、地域住民のネットワークや地域に潜在する文化財を

活かして、歴史的建造物や景観の変遷を調査研究することを目的とする。

2年目となる2018年度は、昨年度の調査成果をふまえて、明日香村が所蔵する明治期の地籍図と、入江泰吉記念奈良市写真美術館・京都大学・奈文研が所蔵する古写真を紹介する特別展『あすかの原風景』を企画・展示した。特別展の会場に地域住民からの情報を募るコーナーを設けたり、明日香村在住の来館者から聞き取りをおこなったりして、地域との関係を強めることを意識した。また明日香村の景観変遷を辿るウォーキングイベントも開催した。

◆中央アジア西部ポスト・クシャーン朝期(4～7世紀)壁画の基礎的研究

代表者・影山 悦子 基盤研究 (C) 継続

本研究は、ガンダーラ美術に用いられる「ポスト・クシャーン朝期」という時代区分を中央アジア西部の美術に応用し、キダーラ、エフタル、西突厥がこの地域を支配した時代の美術を特定することを目的とする。

2018年度は、昨年度に引き続きウズベキスタンにおいてイスラーム以前の壁画をはじめとする出土遺物を調査するとともに、フランスとカナダにおいて研究成果を報告した。

◆呪符木簡の時代的地域的特質からみた「木に文字を記す文化」の史的考究

代表者・山本 崇 基盤研究 (C) 継続

本申請研究は、呪符に込められた祈りや願い等人びとの心性の時代的地域的特質を検討することにより、「木に文字を記す文化」の日本の特質をあきらかにしようとするものである。2年目にあたる2018年度には、江戸時代までの呪符木簡の網羅的収集を継続するとともに、医療やまじないに関わる史資料の検討をおこなった。加えて、既刊報告書等に掲載されている「符籙」を精査し、熟覧調査、撮影の対象となる資料の選定に着手した。

◆春秋戦国時代の馬匹生産体制形成過程にかんする実証的研究

代表者・菊地 大樹 基盤研究 (C) 継続

本研究は、中国養馬史のなかでも目覚ましい発展をみせた春秋戦国時代の馬匹生産体制に焦点をあて、その形成過程をあきらかにすることを目的とする。2018年度はデータの充実を目的に、楚国等の関連遺跡出土馬骨データの集積を進めたほか、馬匹生産に関する文献史料の収集に努めた。

成果の一部は、トルコで開催された国際考古動物会議(ICAZ)、中国成都の第二屆中日考古学論壇にて発表した。

◆3D石器形態研究の確立による日本列島後期旧石器時代の生活・技術・文化の解明 代表者・野口 淳 基盤研究 (C) 継続

本研究は3D計測データにより後期旧石器時代の石器製作技術と人間の行動を復元する方法論を確立することを目的とする。

2年目の2018年度は、秋田県の考古資料、実験製作資料の集中的な計測と解析を実施、また横浜市歴史博物館を会場として第1回考古形態測定学ワークショップを開催したほか、関連学会における報告をおこなった。

◆木造三重塔における組上げ構法の再構築 代表者・西山和宏 基盤研究 (C) 新規

本研究は、木造三重塔における組上げ構法について、積重ね構法、長柱構法、併用式、櫓構法という4つの類型を、側柱や四天柱、左義長柱の立ち方、四天柱の有無、組物の納まり等の諸要素に着目し、組上げ構法の再構築をはかることを目的とする。

2年目となる2018年度は、近畿地方に所在する三重塔について資料を収集し、諸要素における変容の過程やその要因等について分析を進めた。

◆初期官衙における空間構造の成立と展開に関する実証的研究 代表者・小田 裕樹 基盤研究 (C) 新規

本研究は、古代宮都と地方官衙の建物・空間内でおこなわれた活動と空間利用の実態を考古学的分析によりあきらかにし、「口の字形」を呈する初期官衙の歴史的特質を解明することを目的とする。

研究初年度にあたる2018年度は、地方官衙遺跡の集成を実施し、一部の遺跡については実地踏査と出土遺物の実見調査をおこなった。また研究成果の一部について「大宰府政庁I期遺構群の再検討」と題する論文を発表し、市民講座において「古代宮都からみた国庁のすがた」と題する講演をおこなった。

◆黒曜石資源の獲得と消費からみた九州先史時代の社会変化に関する基礎的研究 代表者・芝 康次郎 基盤研究 (C) 新規

本研究は、九州先史時代の主要石器石材である黒曜石の原産地と周辺地域において、黒曜石利用のあり方とその時空間的变化をあきらかにすることで、先史社会の変化を捉えようとするものである。

2018年度は研究初年度にあたり、黒曜石原産地である腰岳での悉皆調査のほか、原産地周辺の縄文時代早期の遺跡(樽浦遺跡、岩下洞穴、平野遺跡)での黒曜石利用の調査を実施した。その結果、少なくとも押型

文期には腰岳山腹の黒曜石が主体的に周辺地域に搬入されている様子を捉えることができた。

◆飛鳥時代・奈良時代の土器様式からみた日本古代の食具様式および食事法の復元的研究 代表者・森川 実 基盤研究 (C) 新規

本研究は、飛鳥時代・奈良時代における食器の器名研究と、土器の考古学的研究とを通じて、日本古代の食器・食具様式および食文化を再現しようとするものである。

2018年度は、「正倉院文書」所載の土器について、その器名を整理し、研究成果を第37回正倉院文書研究会にて発表した。また、飛鳥時代および奈良時代の食器について計量的データの収集を継続的に実施した。このほか、古代調理器具の研究として須恵器挿鉢の調査に着手した。

◆藤原宮造営に伴う造瓦の新技術とその導入経路に関する総合的研究 代表者・石田 由紀子 基盤研究 (C) 新規

本研究の目的は、藤原宮造営という大事業に際し、瓦生産分野でおこなわれた技術改良や国内外との技術交流の実態を解明することである。初年度となる2018年度は、藤原宮造営初期段階の粘土紐技法の瓦窯である。橿原市日高山瓦窯について、発掘調査図面の整理や出土瓦の実測・拓本等の基礎作業を進めた。同時に、藤原宮造瓦で本格的に導入される粘土紐技法について、その導入経路と伝播を探るため、主に報告書等から国内と韓国における粘土紐技法の瓦の出土事例を収集した。

◆近世における北前船と東北産木材の流通に関する年輪年代学的研究 代表者・光谷 拓実 基盤研究 (C) 新規

2018年度は新潟県内に所在する7棟の古建築について現地調査をおこなった。年輪解析作業をおこなった。このなかでスギ材を使った古建築は4棟(中世)、ヒバ材は3棟(近世)確認された。スギ材はおもに壁板類、ヒバ材は柱、縁板等に使われていた。北前船の関係でいうと近世建築3棟のヒバ材がその候補に挙げられるが、年輪パターンのうえでは東北産ヒバがあるいは佐渡産ヒバかの差異はまだ検討されていない。両産地におけるヒバの年輪パターンの違いをあきらかにすることが重要な検討課題となった。

◆近世末期から近代に生じた日本庭園の意匠の地域性と現代への継承—出雲地方を中心に— 代表者・中島 義晴 基盤研究 (C) 新規

近世末期から近代にかけて日本のいくつかの地域において、その地域独特の意匠をもつ庭園群がつくられた。本研究で主な対象とする出雲地方には、住宅等の座敷に面する平坦地を白砂敷きとして、短冊石という細長い長方形の切石や円形の石を飛石に用いて主景とする庭園が数多くあり、それらの意匠が現代も地域に深く根付いている。本研究では、このような地域的な特徴がどのように生まれたのかをあきらかにすることを目的とする。

2018年度は、短冊石が使われた庭園に関する情報収集・現地調査をおこない、全国的な分布の傾向や意匠の種類等について日本造園学会関西支部大会で発表した。

◆先端技術による未発見遺跡の探査・研究および保護手法の開発 代表者・金田 明大 挑戦的研究(開拓)継続

空中・地上LiDARおよび物理探査技術と踏査等を組み合わせて森林内の未発見遺跡の検討をおこなう研究である。

2018年度はデータ提供された春日山・三笠山周辺の空中LiDARデータの解析をおこない、樹木の除去等の基礎作業を終え、人為的な地形改変の抽出を進めている。また、関連資料の調査を春日大社との連携で進めている。

◆歴史災害の実像解明への考古・歴史・地質学的複合解析による災害履歴検索地図の開発 代表者・村田 泰輔 挑戦的研究(開拓)新規

本研究は2018年度から5ヵ年の採択を受けた初年度にあたる。課題とする「災害履歴検索地図」の開発は、2015年挑戦的萌芽研究(課題番号:15617141)で開発した「災害履歴地図」について、新たに1)歴史地図や絵図といった古地理情報、2)大字や小字といった地名や緯度経度等の地点情報の導入、さらに3)災害痕跡種、地点、地域、時間軸、距離軸で災害履歴情報を検索できる検索システムの導入をGIS型データベース上におこない、特に地震や火山噴火の発生予測に向けた、過去の災害実像解明のための「災害履歴地図」の発展的な開発を目的としている。

◆日本と中国における古建築用語の相互訳および英訳を通じた比較研究手法の創生

代表者・鈴木 智大 挑戦的萌芽研究 継続

本研究は、日本と中国における伝統的な木造建築に関する歴史的な用語の比較を通して、東アジアにおける建築文化の特質を見出す研究手法の創生を目指した。

両国の古建築用語の相互訳をおこなうことで、共通点および各国の特質を見出し、さらに英語訳をおこなうことで、用語が持つ意味を客観的に評価し、さらに、翻訳を通じた問題意識の形成・蓄積を通じて、論点を抽出した。

最終年度となった2018年度は、木造建築の構造部材において重要な役割を果たす「貫」等の軸部を中心に論を深め、研究手法としての有効性を確認した。今後、本課題で獲得できた方法論にもとづき、新たな学問領域の構築に臨みたい。

◆日本古代の乳製品加工に関する考古学的証拠の探求

代表者・庄田 慎矢 挑戦的研究(萌芽) 継続

本研究では、遺跡出土土器を対象に、土器残存脂質分析や古プロテオミクス分析等、世界最先端の考古生化学的方法を用いて日本古代の乳製品生産の証拠を探ろうとするものである。2018年度は、実験方法の洗練化を進めるとともに、世界各地での研究事例を収集した。また、2018年12月8日には、国立民族学博物館との共催により、同館にて「古代ユーラシアにおける乳製品の加工と利用ー考古生化学によるミルク研究の最先端と北東アジア地域の位置づけー」を開催した。

◆「建築メンテナンスの歴史学の構築に関する基礎的研究

代表者・海野 聡 挑戦的研究(萌芽) 新規

2018年は研究初年度にあたり、研究体制を整え、学生アシスタントを雇用し、修理工事報告書から得られる過去のメンテナンスに関する情報収集に努めた。

また研究協力者らとともに3回の研究会を開催し、初回の研究会ではプロジェクトを通じてのメンテナンスに対する共通理解を深めた。第2回の研究会では、古代におけるメンテナンスの体制と法的な枠組みを提示し、中世・近世における作業を進めるための指針を提示した。第3回の研究会では中世における具体的な修理の手法とメンテナンスの状況に関する研究発表を受け、古代との比較をおこなった。次年度以降も研究会を開催し、建築メンテナンスの歴史学の構築に向けた基礎的な整理作業を継続

的におこなっていく予定である。

◆日本考古学国際化のための考古学関係用語シソーラス構築と自動英語化の研究

代表者・高田 祐一 若手(A) 継続

本研究は、考古学関係用語シソーラスおよび考古学関係用語の日英対訳データベースを構築し、全国の発掘報告書の全文データを格納している「全国遺跡報告総覧」システムを拡張開発することで日本考古学の国際化に資することを目的とする。

2018年度は、文化財関係用語シソーラスの充実をはかるとともに、全国遺跡報告総覧に登録されている約23,000件の報告書(テキストデータ17億文字)に対し、報告書内テキストを分析し遺跡間ネットワーク図等を作成した。他にも統計的自然言語処理技術を応用した機能を公開した。

◆対照実験を主軸とした東アジア鑄造技術史解明のための実験考古学的研究

代表者・丹羽 崇史 若手研究(A) 継続

本研究は異なった条件で実験鑄造した試料どうしを比較検討する「対照実験」の手法を主軸として、殷周青銅器を中心とした古代東アジアの鑄造技術の解明に取り組むものである。2018年度は3年目にあたる。

本年度は、国内外において青銅器・鑄型等資料調査、および資料集作業を進めるとともに、2018年12月1・2日に芦屋釜の里にて鑄造実験を実施した。また、2019年2月24日には平城宮跡資料館講堂にて、①これまでの実験試料の観察会(ワークショップ)、②蘇榮蓉氏(中国科学院自然科学史研究所研究員)、張昌平氏(武漢大学歴史学院教授)、廉海萍氏(上海博物館研究員)による陶範(土製鑄型)に関する研究報告を軸とした国際研究会「陶範技術の実験考古学」を開催した。

これまでの研究成果の一部は、『曾国考古発見と研究』、『FUSUS』10号に掲載したほか、SEAA 8(2018年6月8~11日 南京)、日本文化財科学会第35回大会(2018年7月7・8日 奈良)、アジア鑄造技術史学会東京大会(2018年9月15・16日 東京)、日本中国考古学会2018年度大会(2018年11月3・4日 奈良)にて報告した。

◆中近世日本と東アジアにおける木造建築の変革に関する比較研究

代表者・鈴木 智大 若手研究(A) 継続

本研究は、東アジア木造建築史の構築に向けた研究構想の一環として、東アジア各国の木造建築を、社会的・技術的・自然環境的な側面から比較研究するものである。

3年度目となる2018年度は、日本の中世~近世初期における木造建築の修理技法について、本研究を通して解明した日本と中国における繋貫の発生と展開のなかに位置づけた。その一部は、メンテナンス研究会(2019年3月16日、於奈文研、東京大学海野聡氏主宰)において、口頭発表をおこなった。また、浙江省中南部に所在する木造建築について現地調査をおこなった。

さらに、国際研究会として、第3回東アジア木造建築史研究会を主催し、日本・中国・韓国における最新の研究成果の共有をはかった。

◆土器残存脂質分析を用いた縄文-弥生移行期における土器利用と食性変化の追跡

代表者・庄田 慎矢 若手研究(A) 継続

本研究は、土器残存脂質分析の方法を主に用いて、縄文時代から弥生時代にかけて、日本列島の各地でどのような食性・調理内容の変化があったのかを実証的に追跡しようというものである。2年目となる2018年度は、各地でのサンプリングに加え、熱分解ガスクロマトグラフィーによる新しい脂質分析測定法の開発・導入をおこない、100を超えるサンプルの測定をおこなった。また、成果の一部を2018年9月にドイツ・イェーナにて開催された8th International Symposium on Biomolecular Archaeologyにて発表した。

◆重要文化的景観の評価方法と保護手法における現状と課題

代表者・恵谷 浩子 若手研究(B) 継続

2018年度は、北海道平取町や岩手県遠野市、愛媛県西予市等での現地調査を実施した。また、最終年度のため調査内容のとりまとめをおこなうとともに、その成果を日本ランドスケープフォーラム総会や、馬と風土とランドスケープデザイン会議で発表することもおこなった。

◆近世庭園の様式と地域性に関する基礎的研究ー重森編年への検証として

代表者・高橋 知奈津 若手研究(B) 継続

本研究は、安土桃山時代から江戸時代の寺院や邸宅の庭園を対象に、その構成要素や様式的特徴について詳細に整理・分析することにより、先行の様式編年研究を検証することを目的とする。

2018年度は、近世庭園の作庭に大きな影響をおよぼしたとされる作庭書『築山庭造伝(前編・後編)』を中心に読解と分析を進めた。

◆荘厳化を目的とした建築装飾に関する研究

代表者・大林 潤 若手研究 (B) 継続

本研究は、寺院建築を中心とした宗教建築における荘厳化を目的とした装飾について、各建築における荘厳化の内容を解明することを目的とする。最終年度である2018年度は、奈良県下の建築について修理工事報告書を中心に装飾要素の確認できる文化財建造物の事例収集を引き続きおこない、合計54棟についてのデータベースの整理作業をおこなった。また、成田山新勝寺および日光東照宮の建築装飾について現地調査をおこなった。

◆財政関係木簡による古代地方社会の実態解明

代表者・山本 祥隆 若手研究 (B) 継続

本研究は、地方官衙遺跡で多く出土する財政関係木簡等の総合的な検討により、古代国家の支配システムとその運用の具体像、また古代地方社会の実態に迫ることを目的とする。

3年目となる2018年度は、ひきつづき全国各地の木簡出土事例を収集しつつ、静岡県浜松市・伊場遺跡群や静岡市・尾羽廃寺跡、山口市・周防鑄銭司跡、兵庫県神戸市・深江北町遺跡等から出土した木簡の熟覧調査、および各遺跡の実地踏査等をおこなった。また、それら調査の成果を平城宮・京跡出土木簡の検討にも応用しながら、学会報告や論文等による成果発信に努めた。

◆古代都城における木器生産に関する基礎的研究

代表者・浦 蓉子 若手研究 (B) 継続

2018年度は平城宮・京の木製品加工の一端として同一材で作られた人形の加工方法および使用方法の復元検討をし、文章化および学会での発表をおこなった。あわせて、これまでの平城宮・京の祭祀具の同一材検討についてまとめ、査読誌に論文を発表した。また、昨年度におこなった竹製品(残材)の集成および加工についての考察を文章化し、学会発表をおこなった。

さらに平城宮内の廃棄土坑の資料から製作途中の薄板および多量の削片、完成品を抽出し、平城宮内における薄板製作についての考察をおこなった。そして、新たに平城宮・京出土の輻輳残材の集成に着手し、あわせて現代の手挽き輻輳について聞き取り調査をおこなった。

◆二階建ての御殿にみる近世武家住宅の実体と空間の構成

代表者・大橋 正浩 若手研究 (B) 継続

本研究は、江戸時代に建てられた武家住宅のうち、私的に用いられたとされる2階建ての御殿に注目し、建物の実体と、利用の実態から、建築的な空間構成についてあきらかにしようとするものである。

2018年度は、昨年度調査した筒井稔氏所蔵東高木家文書の分析を進め、旗本東高木家陣屋に建てられた御殿の享保から大正までの変遷とともに、文政期に存在した2階建て御殿の建築的な実体をあきらかにした。この成果については、日本建築学会東海支部研究報告会で発表している。

なお期間延長申請をおこない、次年度も継続して研究をおこなう予定である。

◆北陸地方の温泉地における共同浴場の建築史的研究

研究代表者・福嶋 啓人 若手研究 (B) 継続

本研究は、江戸時代の加賀藩領である石川県と富山県を対象として、温泉地の共同浴場に関する建築構造や意匠等の歴史の変遷をあきらかにすることを目的とし、共同浴場から建築の一端を把握することを目指している。2018年度は前年度に引き続き、資料整理や図面作成作業をおこない、概ね完了している。これらの調査成果の一部は、「入浴の歴史と建築」(第122回公開講演会)として公表し、また「温泉町と源泉枯渇 - 近代加賀山代温泉を事例として -」(「都市の危機と再生」研究会編『危機の都市史』吉川弘文館、2019年2月)において発表した。

◆大工道具にみる東アジア木造建築技術史の基盤構築

代表者・李 暉 若手研究 (B) 継続

本研究は、中国と日本の伝統的大工道具の調査を通して、古代建築造営の技術を追求するものである。第3年度となる2018年度は、日本建築学会の若手奨励特別研究委員会「建築書と建築理論」と東洋建築史小委員会研究会において、建築技術書『营造法式』(1103)から読み取れる中国宋代の建築設計原理をテーマに、当時大工の役割分担と棟梁が設計に参与した可能性を論じた。また、国際会議において、中国唐代における官式建築の造管体制に関する研究史を発表した。現地調査として、中国浙江省台州地区において、69点の大工道具について詳細な実測調査を実施した。

◆地理情報システムを用いた古代日本における移動コスト算出の基礎的研究

代表者・清野 陽一 若手研究 (B) 継続

3年目となる2018年度は分析の基礎となる地理データの収集・整理をおこなうとともに、GPS/GIS等の機器を用いた歩行実験をおこなった。延喜民部省式主計上には、諸国からの行程日数が記載されている。その中で移動速度が速いものとしては、近国に区分される国々が該当し、京からそれぞれの国までの1日あたりの移動距離を計算すると、平均して50km近くになる。この移動速度を検証するため、近国の一つである美濃国を対象として実験をおこなった。しかし、日常的に運動している現代人にとっても、かなり負荷の高い速度であった。これまで文献史学の研究でも言及されてはきたが、この数字は実際の移動速度を単純に示しているわけではないことが実験によって改めて確かめられた。今後はさらに実験を重ね、古代の人々の移動の実態に迫っていきたい。

◆出土木製遺物の水中保管時における劣化を効果的に抑制する手法の開発

代表者・松田 和貴 若手研究 (B) 継続

本研究では、出土木製遺物の水中保管環境における劣化を効果的に抑制するための、人的・経済的な負担や環境負荷が小さく、簡便かつ継続的に運用可能な手法の開発を目的としている。

2018年度は前年度に引き続き、出土木材を試料として、溶存酸素量および温度条件の違いが、水中における木材の劣化に及ぼす影響を定量的に検討するための腐朽実験をおこなった。

試料は継続的に分析をおこなっており、種々の環境条件と試料の劣化程度との相関を中長期的に検討する予定である。

◆彩色文化財のTHz Imaging及びμ FocusX線CTを用いた非破壊 界面調査

代表者・金 旻貞 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、テラヘルツ波イメージング手法による彩色文化財の内部構造調査から、彩色文化財の劣化情報を正確に把握することである。続いて2018年度は、1950年代に臨時応急処置した漆喰下地を基底材にする資料の保存状態の確認をおこなった。

その他に、これまでモノクロで画像解釈に難しかったテラヘルツ波イメージング結果についてイメージプロセッシングソフトウェア (PicMan, WaferMasters, Inc.) を用いることで、損失カ所等の内部構造情報に適した条件を見つけ出すことを試みた。

研究成果の一部は、学会等で公開する。

◆地震痕跡を残す災害遺構の保存と公開活用に関する研究

代表者・小沼 美結 若手研究 (B) 継続

本研究は、国内外で発生した大規模な自然災害の跡地（災害遺構）とその関連施設について、保存に至った経緯と現状を網羅的に調査し、得られた知見を今後の災害遺構の保存と活用に活かすことを目的とする。

3か年計画の2年目にあたる2018年度は、主に日本国内に保存されている災害遺構の記録や災害の跡地の現地視察や、活用方法等についての文献等の調査・収集等をおこなった。

◆古墳時代中期王権中枢部における埴輪生産体制の実証的研究—奈良市佐紀古墳群を中心に—

代表者・大澤 正吾 若手研究 (B) 継続

本研究は、ウワナベ古墳出土埴輪を中心に佐紀古墳群出土埴輪の整理・研究を通じて、古墳時代中期の王陵級古墳における埴輪群組成の実態をあきらかにすることを目的とし、畿内中枢部における埴輪生産体制の時系列的な変化とその背後にある王権による労働力編成の在り方を実証的に論じることを目指す。2年目となる2018年度は、引き続きウワナベ古墳出土埴輪の注記、接合検討、実測をおこなった。また、ウワナベ古墳の造出周辺で採集された埴輪について『奈文研紀要2018』で報告した。

◆渤海遺跡出土建築部材の基礎的研究—3次元計測データの活用—

代表者・中村 亜希子 若手研究 (B) 継続

本研究は、東京大学等が所蔵する渤海国遺跡出土遺物の3次元計測とデータ解析を通じ、当該国における陶製建築部材の生産・流通の体系をあきらかにすることを目的とする。また、3次元計測の一手法であるSfM-MVS技術の文化財分野での普及も、課題のひとつである。

2018年度は新たに長方磚17点と方磚26点を計測し、破片のデータから完形の磚の紋様の復元を進め、上京城遺跡出土長方磚に関しては、4つの範の復元を終えた。また、小片資料の型式の判断が可能となったため、型式による出土地の傾向の分析も並行しておこなっている。

◆奈良時代に用いられた色材・素材のナノ構造解明

代表者・杉岡 奈穂子 若手研究 (B) 継続

本研究は、染色・絵画等に用いられる彩色材料に加え、文化財全体を構成する金属、

木材、繊維、あるいは、漆・膠等の固着剤を含めた様々な物質で作られている材料の微細構造観察をおこなっている。薬師寺東塔初層の天井裏板および支輪裏板の彩色材料調査を進めているが、2018年度は緑色彩色のほかに赤色、褐色、灰色等の剥落片を分析した。クロスセクションを作製し、断面方向から組成分析および層構造の観察をおこなったところ、特有の構造が観察された。また、灰色に変色している部分は当初どのような色で塗られていたか不明といわれている。本研究で得られた結果から彩色材料をあきらかにし、さらに、変色機構の解明にも繋げていきたいと考えている。

◆森蘊の業績と日本庭園史の作成—歴史的庭園のデータベース作成

代表者・マレス・エマニュエル 若手研究 (B) 継続

本研究の目的は、日本庭園史家であり、また作庭家でもあった森蘊（もり・おさむ、1905-1988）の業績を再評価すると同時に、昭和期の日本庭園史学の構築を再考することである。奈良文化財研究所に保管されている多くの資料（図面・スケッチ・写真・原稿・書簡等）の整理を進めながら、森と一緒に働いた職人の聞き取り調査を通して考察を深める。

初年度に引き続き、2018年度は現地調査や聞き取り調査を進めた。また、2018年8月18日に森蘊庭園研究室（森蘊旧宅）にて「昭和の作庭記森蘊の業績と日本庭園史の作成」という研究会を企画し、来年度にはその報告書を発行する予定である。2018年9月28日から10月1日まで米国ポートランドにて開催された欧米日本庭園協会の国際シンポジウム「Japan's Gift to the World - Japanese Gardens as Global Phenomenon」に参加し、英語で研究の成果を発表した。さらに、2019年3月28日に奈文研のホームページで「森蘊旧蔵資料」の目録を公開した。こうして、資料の整理ができたので、これからはデジタル化を進め、データベース作成に取り掛かる予定である。

<https://www.nabunken.go.jp/research/moriosamu.html>

◆シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究

代表者・山藤 正敏 若手研究 新規

本研究は、キルギス共和国北部に位置するチューン渓谷西部を対象とした考古遺跡の精細な分布調査を実施し、シルクロード天山北路の形成過程をあきらかにすることを目的にしている。

研究初年度である2018年度は、カラバルタ市周辺地域（東西35km×南北50km）を本研究対象として設定し、地域全体の状況を把握するために、構成する地勢全体における概括的な分布調査を実施した。結果として、既知の都市遺跡を含む多様な種類の21遺跡を記録した。来年度以降は、各地勢における重点的な分布調査を実施し、対象地域の文化変遷を精細に把握していく予定である。

◆アンコール王朝の終焉と陶磁器需要の変容に関する考古学的研究

代表者・佐藤 由似 若手研究 新規

本研究は、カンボジア史の中でも衰退の時代と考えられてきたアンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけての王都出土遺物に関する実証的な調査をおこなうことを目的としている。特に陶磁器需要の変化について着目し、その背景にある社会・経済・宗教的変容について検討を試みるものである。初年度にあたる2018年度には16世紀の王都であるロンヴェーク遺跡の現地調査をおこなった結果、非常に豊富な量の遺物が出土し、在土土器・陶器に加え多くのアジア各地からの輸入陶磁器を確認したため、その基礎資料を作成した。

◆発掘後の劣化特性の予測技術に基づく出土鉄製文化財の新たな保存管理システムの構築

代表者・柳田 明進 若手研究 新規

本研究は鉄製文化財が出土した遺跡の埋蔵環境から、鉄製文化財の保管・展示環境下でのさらなる劣化進行の有無を予測し、それを未然に防ぐべく個々の鉄製文化財に応じた適切な保存・展示環境の提案を可能とすることを目的としている。

一年目となる2018年度は、埋蔵時における鉄製遺物の腐食形態におよぼす埋蔵環境の影響を検討するため、遺跡に埋没した鉄製遺物を想定した鉛直一次元カラムを用いた室内実験を実施し、鉄製遺物内部に塩化物塩が集積し得る埋蔵環境を検討した。これらの成果について、日本文化財科学会第35回大会等で学術発表をおこなった。

◆昭和初期における歴史的建造物保存修理の構造補強体系の構築

代表者・前川 歩 若手研究 新規

本研究では、昭和初頭から20年代頃までの古建築修理に、構造エンジニアがどのように介入し、受容され、どのような特質をもつのかをあきらかにし、歴史的建造物の保存修理において、その根幹をなす「構造補強」という行為を再考するための新たな

な枠組みを構築することを目的とする。

初年度となる2018年度は、川崎市立日本民家園所蔵の大岡實文庫資料を中心に法隆寺五重塔・金堂の昭和修理に関わる資料を収集し、構造項目について分析をおこなった。

◆セット論・生産流通論からみた古代国家成立期の馬装体系の変化に関する研究
代表者・片山 健太郎 研究活動スタート支援 新規

本研究は古墳時代と古代の馬具研究の狭間にあり、十分に進んでいない7世紀後半を中心とする倭の馬具について、生産、使用の実態を資料に即してあきらかにする。それにもとづき、馬装体系と呼称される馬具の種類と組み合わせにより様々な社会関係を表示するシステムが当該期には存在したのか、存在したのであれば、前段階の馬装体系とどのように異なるのかをあきらかにする。

初年度となる2018年度は、7世紀の倭の馬具資料と関連資料を集成し、群馬県御門1号墳、同県鍛屋地2号墳、山梨県御崎古墳、同県寺ノ前古墳等の馬具の調査をおこなった。

◆カザフスタンにおける後期旧石器文化形成プロセスの研究
代表者・国武 貞克 新学術領域研究(研究領域提案型) 継続

カザフスタン南部において2017年度に新規に発見した29ヵ所の旧石器時代遺跡のうち、層位的な堆積が良好な3遺跡について7月～10月に発掘調査を実施した。チョーカン・バリハノフ遺跡は、2013年のドイツ隊のOSL年代測定により最下層の第6文化層が約4万年前であることがわかっておりカザフ最古の文化層とされている。そのため、第6文化層の下位の文化層の有無を確認するために、台地上の平坦面から沖積面までの比高10mを断ち割る大規模なトレンチを設定した。その結果、第6文化層の下位から新しく3枚の文化層を発見した。地表下9.2mで検出した最下層の第9文化層は、小口面から先細りする石刃を剥離する技術がみられ、ロシアアルタイ地域にみられる後期旧石器時代初頭(IUP期)の石器群と共通する。現状で、中央アジア西部の天山-パミール地域において後期旧石器時代最古の文化層と位置付けられる。ほかに、ピリョックバスタウ・ブラック1遺跡の発掘調査では、中石器時代と後期旧石器時代前期(EUP期)の2枚の文化層が検出された。天山山脈北麓のクズルアウス2遺跡では、レスの安定堆積

層中から赤色オーカーや5基の地床炉をともなって4枚の文化層を検出した。石器群の内容は、中央アジア西部で初めて検出された3万年代の石刃石器群であり、12月に京都で開催された国際会議で発表したところ大変注目された。以上のように、3遺跡の本格的な発掘調査により大きな成果があったため、来年度以降は、中央アジア西部最古の文化層が検出されたチョーカン・バリハノフ遺跡第9文化層と中央アジア西部で初めて石刃石器群が層位的に検出されたクズルアウス2遺跡について、さらに本格的な発掘調査を実施する予定である。

◆東アジアにおける隅一柱式建物の比較研究：日中韓三国木造建築技術の源流と特質
代表者・唐 聡 特別研究員奨励費 転入

本研究は夏見庵寺金堂のような柱配置をもつ「隅一柱式建物」の類型化する研究をはかるものである。その独自の建築的特色を探り、東アジアにおける隅一柱式建物の全体像と技術交流の状況を解明を目的とする。

2018年度は最終年度にあたり、中国敦煌壁画に確認された古代隅一柱式仏殿の図と楼閣の図に関する研究を進め、建築的特徴を巡って日本の諸例古代隅一柱式金堂遺跡との比較研究をおこなった。研究成果の一部は日本建築史学会2018年度大会(2018年4月21日、京都)、第三回東アジア木造建築史研究会(2019年2月11日、奈良)にて報告した。

学会・研究会等の活動

◆文化財写真技術研究会

2018年7月6～7日、第9回(通算30回)文化財写真技術研究会の総会と研究集会を、平城宮跡資料館講堂で開催した。特集テーマは「記録のなかの表現手法」である。

1日目は、総会に続いて宮内康弘氏(岡村印刷工業)に「然れど印刷」と題して、印刷を通じたモノの見え方についてご講演いただいた。2日目午前は、藤原工氏(灯工舎)に「展示照明の現在」と題して、展示照明を通じたモノの見せ方についてご講演いただいた。午後は、写真表現を通じたモノの見方について、特集担当栗山の趣旨説明後、6本の発表をおこなうものとした。「金工品の写真表現」(栗山雅夫; 奈良文化財研究所)、「漆工品の写真表現」(岡田愛氏; 京都国立博物館)、「染織品の見え方」(北田仁司氏; 宮内庁正倉院事務所)、「平面文化財の表現方法」(飯田ゆりあ; 奈良文化財研究所)、「土器片の見方」(石井隆博氏; 東広島市教育委員会)、「水漬け木製

品のすわれ」(井上直夫氏; 研究会会長)。写真で文化財を記録する際の表現や着眼点等、資料写真でも主観的な目線が鍵となることを確認し、これらを盛り込んだ会誌『文化財写真研究』VOL.9も刊行した。

なお、当日は甚大な被害をもたらした西日本豪雨と重なり、発表者の石井氏は途中で引き返して避難所運営に従事される事態となった。ここに謹んで被災された方々にお見舞いを申し上げ、その復興を心よりお祈りいたします。(栗山 雅夫)

◆庭園の歴史に関する研究会

2018年10月21日に、平城宮跡資料館小講堂において庭園の歴史に関する研究会を開催した。2016年度から5ヵ年は近世庭園を研究対象としており、3年目の2018年度は「茶の文化と庭園」をテーマとし、近世の茶の湯の展開が庭園構成やそこに配された建物にどのような影響を与えるかを検討する機会とした。

報告者と内容は、八尾嘉男氏「江戸時代の茶の湯と庭園」、高橋知奈津「近世造園書にみる「露地」・「茶庭」、矢ヶ崎善太郎氏「茶会の場の建築と庭—近世庭園における茶室と茶屋」、万城あき氏「岡山後楽園と池田家の茶について」、三尾次郎氏「玄宮園と井伊家の茶について」であった。

総合討議では、近世庭園における茶室と茶屋の違いや、露地の定義について議論がなされ、回遊式庭園での喫茶のあり方を考えるには、茶の湯に限らない多様な茶のカタチがあることを念頭に検討する必要があることが確認された。(高橋 知奈津)

◆木簡学会研究集会

2018年12月1・2日の両日、第40回木簡学会総会・研究集会を、平城宮跡資料館講堂・小講堂において開催した(参加者146名)。

1日には、方国花奈文研客員研究員の研究報告「古代日本木簡の標準字形」と、井上智博氏((公財)大阪府文化財センター)「大阪府船橋遺跡の発掘調査と出土木簡」、近藤玲氏(徳島県教育委員会)「徳島県川西遺跡の発掘調査と出土木簡」の2本の事例報告があった。また、2日には、山本祥隆「2018年全国出土の木簡」、山根謙二氏(美祢市教育委員会)「長登銅山跡の発掘調査と出土木簡」、大八木謙司氏((公財)東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター)・岩淵令治氏(学習院大学)「東京都新宿区四谷一丁目遺跡の発掘調査と出土木簡」の3本の事例報告があった。

例年通り各調査機関の協力を得て実物の木簡を参加者の熟覧に供し、充分な実物観察を踏まえた多彩な議論を展開することが

できた。

なお、会誌『木簡研究』第40号を編集・刊行した（編集担当：馬場基）。（渡辺晃宏）

●東アジア木造建築史研究会

2019年2月11日（月・祝）、平城宮跡資料館小講堂において、第3回東アジア木造建築史研究会を開催した（参加者16名）。東アジア木造建築史の構築を目的とした国際研究会である。プログラムは以下の通りである。

司会：鈴木智大（奈文研）

通訳（日韓）：金碩顯（韓国A&A文化研究所）、（日中）：兪莉娜（日本学術振興会）

Session 1 韓国、発表：李雨鍾（韓国・嶺南大学）「高麗時代における多包系建築の成立過程」、講評：韓志晩（韓国・明知大学）

Session 2 中国、発表：唐聡（中国・重慶大学）「7～11世紀の敦煌壁画にみる外周等間型柱配置の仏殿」、講評：丁焄（中国・天津大学）

発表および講評を通じて、各国の建築史研究に対する相互理解を獲得し、研究の手法や考察の視点等の詳細な検証、そして東アジアの比較研究の可能性の探求等、様々な観点から活発な議論を展開することができた。

なお、本研究会はJSPS科研費16H06113（研究代表者：鈴木智大、研究協力者：韓志晩、丁焄、李暉）、16K14369（研究代表者：鈴木智大、研究分担者：李暉）の成果の一部である。（鈴木智大）

◆条里制・古代都市研究会

2019年3月2・3日に平城宮跡資料館講堂において第35回条里制・古代都市研究会大会を開催した。2日は「恭仁京の再検討」を大会テーマとして、村元健一氏「隋唐洛陽城の成立過程—恭仁京との比較のために—」、小笠原好彦氏「聖武天皇の恭仁宮・京の造営と洛陽城」、古川匠氏「恭仁宮中心部の構造と造営順序の復元研究—天平十三・十四年元日朝賀関連遺構の分析から—」の3本の研究報告と活発な質疑応答が交わされた。

3日は調査レポートとして十文字健氏「平城京南方遺跡範囲確認調査の成果」、南部裕樹氏「東大寺東塔院跡の発掘調査—天平の創建と鎌倉再建—」、山本雅和氏「平安京右京三条三坊の邸宅」、柳澤和明氏「陸奥国府多賀城跡の国司館跡」、久家隆芳氏「高知県南国市若宮ノ東遺跡の発掘調査成果」の各報告があり、質疑応答がおこなわれた。参加者は100名であった。

（小田 裕樹）

国が実施する事業等についての調査・協力

●平城宮・京跡の整備

昨年度に引きつづき、国土交通省や文化庁による各種事業に対して、調査研究・協力・専門の見地からの助言をおこなった。

平城宮跡南辺の朱雀門広場および国土交通省の平城宮いざない館が平成30年3月に供用開始し、数年携わってきたこの周辺での工事等ともなう立会調査はほぼなくなった。ただし、平城宮跡内における文化庁や国土交通省がおこなう整備工事等ともなう立会調査案件に対応した。

大極殿院南門の復元工事は、平成30年度には素屋根の建設がほぼ完了するところまで進んだが、定期的に開催される工事関係者による会議に出席するとともに、現場からの各種依頼に対応した。南門の復元工事の進捗ともない、11月23日（金・祝）には木挽祭・手斧始式がおこなわれる等、朱雀門広場や平城宮いざない館と一体となったイベントが開催されるようになり、これらの事業に協力した。

2010年から進めている第一次大極殿院の復元研究は、飾金具の意匠が製作技法と関連している可能性が高いと考えられたため、金具の製作実験をおこない、有識者を招いた検討会を計5回開催して検討を深めた。それらの成果を踏まえ、南門や東楼・西楼等の建物に備える飾金具の意匠を決定した。その成果の一部は、『奈文研紀要2019』を参照されたい。また、南門の扁額について、その有無を含め、あるとすればその題字や書体等をどうするか、といった点について外部有識者を招いた検討会を開催して決定した。（箱崎和久）



第一次大極殿院の飾金具復元検討会（2018年12月13日開催）

●高松塚古墳壁画の保存のための調査研究

国営飛鳥歴史公園内に設置された仮設修理施設において、高松塚古墳壁画の現状を把握するとともに材料に関する知見を得るために、石材、漆喰および彩色材料等に対する調査をおこなっている。2018年度は石

材、漆喰および彩色に関する調査研究を以下の通りおこなった。

石室石材の現状をできる限り正確に把握するため、石材に生じている割れの分布や状態の目視観察ならびに割れの拡大が懸念される部分のクラックスケールを用いた定点観測をおこなった。あわせてモニタリング手法としての多視点ステレオ画像（SfM/MVS）による量的評価の可能性を検討した。

床石を拘束するための保護フレームの5分の1サイズのモックアップを作製し、検討をおこなった。

壁画の現状を記録するため、床石と南壁を除く全11石に対して、経年変化の記録撮影をおこなうとともに、可視光と赤外線によるデジタルスキニングを実施した。また、色料に関する面的な情報を得るため、北壁、天井2および天井3に対しては紫外線を用いたスキニングも実施した。

東壁3、西壁3および東壁1の漆喰の状態をテラヘルツ波イメージングにより調査した。また、テラヘルツ波イメージングで得られていたデータの解析法を改善することにより、これまで見落としていた空隙を検出できるようになった。

壁画の色料を精査するためにモバイル型のX線回折装置の開発に取り組んでいる。2018年度は、X線回折線の強度を高くするため、コリメータを改良した。その結果、X線回折線の強度を高めることに成功した。次年度は、壁画分析への実用化に向けて装置構成を実現する。

また、これまで高松塚古墳壁画に対して実施してきた蛍光X線元素分析データをまとめた報告書の2019年度刊行をめざして、編集作業をおこなった他、熊本地震により被災した装飾古墳である井寺古墳（嘉島町）、永安寺東古墳（玉名市）等の復旧復興に向けた調査をおこなった。（高妻 洋成）



高松塚古墳壁画のデジタルアーカイブスキニング

●キトラ古墳に関する調査研究

キトラ古墳関係では、以下の事業を実施した。

遺物に関する事業では、石室床面から取り上げた土壌中に含まれていた夾紵棺片についてクリーニングを実施した。出土品のうち主要なものについては、3次元計測デー

タをもとに3次元プリンタで出力した。遺物は点検作業をおこなうとともに、温度湿度のモニタリング、調湿剤等の交換作業を実施した。

発掘調査成果の整理・活用にかかる事業としては、3次元計測の補測調査をおこない、測量データを補完した。また、覆屋存在時の墳丘および石室と、整備後の墳丘および石室のVRコンテンツ作成作業を実施した。

科学分析および壁画の記録撮影事業では、キトラ古墳壁画の定期的な点検法を検討し、SfM/MVSによる3次元計測の試験を南壁に対して実施した。また、泥に覆われている可能性のある壁画十二支像（辰・巳・申）のX線撮影による調査を実施し、辰が描かれていると推測される場所に何らかの図像が描かれているように見える部分があることが判明した。壁面各面と図像細部について、高精細カメラによる経年変化の記録撮影を実施した。

国営飛鳥歴史公園の文化庁壁画保存管理施設では、奈文研職員が常駐して施設の日常管理および運営をおこなうとともに、壁画や出土遺物を展示公開した。壁画非公開期間は、展示室にて出土遺物等を公開し、パネル作成等の展示業務全般をおこなった。また、歩行性昆虫や環境カビの調査と温湿度調査を実施した。

古墳の活用にかかる事業としては、中国における高句麗壁画、およびイタリアでの壁画保存活用状況を視察した。古墳現地に設置した乾拓盤を活用して、壁画に関する講演会と乾拓体験教室を実施した。また、『特別史跡キトラ古墳環境整備事業報告書』を刊行し、整備に関するリーフレットの韓・伊・西・仏語版を作成した。（玉田 芳英）



キトラ古墳壁画南壁のモニタリングのためのSfM/MVSによる撮影

現地説明会

◆平成30年6月17日（日）

平城第595次（平城宮跡東院地区）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
研究員 海野 聡
参加者813人 調査面積1,512㎡

◆平成30年9月15日（土）

飛鳥藤原第198次（藤原宮大極殿院）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
主任研究員 廣瀬 寛
参加者694人 調査面積1,050㎡

◆平成30年11月11日（日）

東大寺東塔院跡発掘調査現地説明会
（東大寺・奈良県立橿原考古学研究所と共催）
都城発掘調査部（平城地区）
主任研究員 今井 晃樹
研究員 芝 康次郎
参加者1,148人 調査面積885㎡

◆平成30年12月15日（土）

平城第602次（平城宮跡東区朝堂院）
発掘調査現地説明会
都城発掘調査部（平城地区）
研究員 福嶋 啓人
参加者569人 調査面積560㎡



飛鳥藤原第198次調査 現地説明会

2 研修・指導と教育

文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。2018年度は、専門研修15課程を開催した。(2018年度文化財担当者研修課程の一覧参照)。研修の多くは、講義形式が主体であるが、研修後の感想文等によると、実地踏査や実技・実習を取り入れた研修が好評であった。研修総日数84日、研修生総数211名であった。

各部・センターでは、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査、出土遺物の保存処理、遺構の保存、遺構整備等に関して、指導および助言等の協力をおこなっている。2018年度の主な協力について一覧を別表に掲載した。このほか、文化庁、地方公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査をはじめ、遺跡・遺物の保存、遺跡の整備および公開に関する調査、地下遺構の遺跡探査、動物遺存体分析、年輪年代測定等の共同研究や受託研究も進めている。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座文化遺産学分野の客員教員として玉田芳英（考古学）、高妻洋成（保存科学）、尾野善裕（考古学）、馬場基（史料学）、山崎健（環境考古学）の5名がそれぞれの講義、演習および実習をおこなうとともに、文化遺産学分野を専攻する院生に対して必

要に応じて奈良文化財研究所において研究指導をおこなった。

2018年度には、修士課程3名、博士後期課程6名に加え、京都大学大学院総合生存学館（思修館）総合生存学専修博士一貫課程の5年次学生を研究生として受け入れ、研究指導をおこなった。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として、森本晋（文化財学の諸問題Ⅰ・Ⅱ）・神野恵（歴史考古学特論Ⅰ・Ⅱ）・渡辺晃宏（歴史資料論Ⅰ・Ⅱ）を開講し、博士後期課程の大学院生への研究指導をおこなった。

いずれも平城宮・京跡等の遺跡や、そこから出土した土器・土製品や木簡をはじめとする遺物、あるいは遺跡・遺構・遺物に即した文化財に関するデジタル情報の諸問題等、実地の調査研究に密着した講義・演習であり、通常の大学院における授業では経験することのできない、奈良文化財研究所ならではの特色ある教育を実践することができた。

奈良大学への教育協力

2017年度に引き続き「文化財修景学」（担当：文化遺産部遺跡整備研究室）に出講した。遺跡等の保護と整備について、最新事例を紹介しながら体系的に講義をおこない、平城宮跡において学外授業を実施した。

2018年度 日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧（委員の委嘱を受けているもの）

(青森) 三内丸山遺跡	胡宮神社社務所庭園 日吉神社境内 清水山城跡 大津市伝統的建造物群	益田氏城館遺跡群
(岩手) 鳥海柵跡 徳丹城跡	(京都) 宇治川太閤堤跡 恭仁宮跡 大安寺旧境内附石橋瓦窯跡	(岡山) 高梁市伝統的建造物群 吉岡銅山関連遺跡 西高月遺跡群 高梁市旧吹屋小学校校舎
(宮城) 多賀城跡	(大阪) 百済寺跡 鳥坂寺跡 百舌鳥古墳群 日根荘遺跡 飯盛城跡 二子塚古墳 難波宮跡 旧西尾家住宅	(広島) 甲立古墳 備後国跡 旧中島地区被爆遺構
(秋田) 横手市伝統的建造物群 脇本城跡	(兵庫) 赤穂城跡 古代官道 五斗長垣内遺跡 山陽道野磨駅家跡 石の宝殿および竜山石探石遺跡 五色塚(千壺)古墳 小壺古墳	(山口) 周防銭銭司跡 周防国分寺旧境内 周防国府跡等官衙遺跡
(福島) 宮脇廃寺跡 八十里越	(奈良) 中宮寺跡 栗山古墳 春日古墳 上牧久渡古墳群 大乘院庭園 法隆寺金堂壁画 橿原市伝統的建造物群 五條市伝統的建造物群 宇陀市松山地区伝統的建造物群	(徳島) 勝瑞城館跡
(栃木) 佐貫石仏	(鳥取) 大御堂廃寺跡 とっとり弥生の王国 若桜町伝統的建造物群	(香川) 快天山古墳 丸亀城跡
(群馬) 上野国佐位郡正倉跡 上野国新田郡家跡	(鳥根) 出雲国府跡 石見銀山遺跡 荒神谷遺跡	(福岡) 大宰府史跡 太宰府跡推定客館地区 鴻臚館跡
(神奈川) 橋樹官衙遺跡群		(佐賀) 肥前陶器窯跡 三重津海軍所跡
(石川) 金沢城 真脇遺跡		(長崎) 鷹島海底遺跡
(福井) 朝倉氏遺跡 兜山古墳 金ヶ崎城跡 柴田氏庭園 興道寺廃寺跡 若狭町伝統的建造物群		(熊本) 棚底城 井寺古墳 大野窟古墳
(長野) 塩尻市伝統的建造物群		(大分) 長者屋敷官衙遺跡 元町石仏 法鏡寺廃寺跡
(岐阜) 岐阜城跡		(宮崎) 日向国府跡 蓮ヶ池横穴群
(静岡) 新居関跡 遠江国分寺跡 片山廃寺跡 江戸城石垣石丁場跡		
(愛知) 鳥原藩主深溝松平家墓所 旧龍性院庭園		
(滋賀) 敏満寺石仏谷墓跡 多賀神社奥書院庭園		

2018年度 文化財担当者研修課程一覧

区分	課程	実施期日	定員	対象	内容	担当室	研修 日数	応募 者数	受講 者数
専 門 研 修	建築遺構 調査課程	6月11日 ～ 6月15日	6～ 15名	地域の中核となる 地方公共団体の 文化財担当職員 若しくはこれに 準ずる者	発掘調査で検出される建築遺構や出土建築部材に 関して必要な、上部構造の専門的知識や発掘方法 等についての研修	遺構研究室	5日	8名	8名
	古文書歴史 資料調査 基礎課程	6月18日 ～ 6月22日	8～ 15名	〃	古文書・歴史資料の調査・管理等を担当する立場 にあるが、当該分野に関する専門的教育を受けた ことのない地方公共団体等の文化財担当者を対象 に、基礎的知識の習得を目指す研修	歴史研究室	5日	12名	12名
	近現代建築 保存活用 課程	7月9日 ～ 7月13日	8～ 15名	〃	近現代建築の価値の理解、その保存方法および活 用方法について、理念、制度、修理、耐震対策、 管理、活用等の面から講義をおこない、近現代建 築の保存に取り組む自治体担当者としての必要な 知識の習得を目指す研修	建造物研究室	5日	24名	24名
	木質文化財の 科学的調査 基礎課程	7月23日 ～ 7月27日	8～ 15名	〃	木質文化財を調査する際に必要となる木材科学、 年代学、保存科学等の科学的な基礎知識を習得し、 担当現場に生かすことを目指す研修	年代学研究室	5日	8名	8名
	地質考古 調査課程	9月3日 ～ 9月7日	8～ 15名	〃	遺跡等の発掘調査で必要とされる、地層・基礎土 木・土壌等に関する基礎的な専門知識や調査技術、 さらにそれらに根ざした環境復元方法の習得を目 指す研修	遺跡・調査 技術研究室	5日	29名	29名
	文化的景観 調査計画 課程	9月10日 ～ 9月14日	8～ 15名	〃	文化的景観の保護にこれから取り組む担当者を対 象に、文化的景観の歴史・概念、保護制度、調査 手法および保存計画立案等についての基礎知識を 習得することを目的とする研修	景観研究室	5日	10名	10名
	遺跡情報記録 課程	9月18日 ～ 9月21日	8～ 15名	〃	遺跡・遺物の正確な記録を取る方法と、情報の保 存活用法としてのGISやデータベースの利用に 関する専門知識と技術を習得し、遺跡情報の公開・ 利活用を目指す研修	文化財情報 研究室	4日	21名	21名
	低湿地遺跡 調査課程	10月3日 ～ 10月5日	6～ 15名	〃	低湿地遺跡の発掘調査から報告書作成までについ て必要な知識を習得することを目的とする研修	環境考古学 研究室	3日	8名	8名
	保存科学Ⅰ (金属製遺物) 課程	10月9日 ～ 10月17日	8～ 15名	〃	本課程では、金属製遺物の劣化現象に対する理解 を深め、保存処理および処理前後の環境調整が劣 化の抑制にもたらす効果について、保存処理工程 および処理に係る劣化状態調査の実習と講義を交 えて学ぶ研修	保存修復科学 研究室	7日	12名	12名
	文化財写真 課程	11月26日 ～ 12月6日	8～ 15名	〃	文化財の記録の中核をなす記録写真撮影について、 様々な文化財写真分野の基礎知識と、デジタル写 真を中心とした実習による実技を習得できる研修	写真室	9日	20名	20名
	報告書編集 基礎課程	12月6日 ～ 12月13日	8～ 15名	〃	文化財調査記録に必要な不可欠な報告書出版につ いて、記述内容の意義や記述記録の基礎知識を習 得するための研修	企画調整室	6日	15名	15名
	報告書デジタル 作成課程	12月13日 ～ 12月20日	8～ 15名	〃	報告書出版に必要な編集やコンテンツ制作の技術 について、デジタル編集を中心に据えた実習で、 技術を習得することを目的とした研修	企画調整室	6日	7名	7名
	史跡等保存 活用課程	1月15日 ～ 1月25日	8～ 15名	〃	座学・隣地講義を通して史跡の整備計画について 基本的知識を吸収し、基本構想・基本計画の立案 演習をおこなう研修	遺跡整備 研究室	9日	22名	21名
	出土文字 資料調査 課程	2月18日 ～ 2月22日	8～ 15名	〃	木簡・墨書土器・漆紙文書等、出土文字資料の調 査のための実践的な技術や知識の習得を目的とす る研修	史料研究室	5日	11名	10名
保存科学Ⅳ (遺構・石造文化財) 課程	2月25日 ～ 3月1日	8～ 15名	〃	本課程は土壌や岩石で構成される遺構を対象に、 環境制御による遺構の保存法を習得することを目 的として、遺構の劣化要因および劣化の進行に対 して環境がおよぼす影響について、環境調査の実 習等を交えて学ぶ研修	保存修復科学 研究室	5日	6名	6名	

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展「あすかの原風景」

2018年4月27日～7月1日

明日香村に残る地図や古写真等の貴重な資料をもとに、明治期から昭和中期にかけての飛鳥の集落の様子を紹介。会期中の入館者数8,816人。5月25日ウォークイベント開催。図録『あすかの原風景』刊行。



写真：春期特別展ウォーキングイベント

◆夏期企画展「第9回写真コンテスト「飛鳥のいきもの」

2018年7月27日～9月2日

「飛鳥のいきもの」をテーマに募集した122点の作品を会場に展示。審査と来館者投票による上位者を表彰した。会期中の入館者数2,428人。

◆秋期特別展「よみがえる飛鳥の工房―日韓の技術交流を探る」

2018年10月5日～12月2日

日韓の技術交流に焦点をあて、飛鳥池工房遺跡の発掘調査の成果を中心に紹介。会期中の入館者数7,492人。図録『よみがえる飛鳥の工房―日韓の技術交流を探る』刊行。

11月9日曲物イベント開催。

◆冬期企画展「飛鳥の考古学2018」

2019年1月25日～3月17日

奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会との共催。発掘調査が続く飛鳥藤原地域の、2017年度の発掘調査成果を紹介。会期中の入館者数3,117人。図録『飛鳥の考古学2018』刊行。

平城宮跡資料館の展示

◆夏期企画展「たいけん！なぶんけん」

2018年7月22日～9月3日

夏のこども展示。まだまだ、一般にはなじみのない奈文研の仕事内容のうち、都城調査部の業務を子どもたちやその保護者の皆さんに分かりやすく伝え、奈文研や発掘調査、考古学等への理解と興味を持ってもらうことを意図した展示。夏休みだったことから、ワークショップを兼ねたギャラリートークに力を入れ、6回実施し、200名あまりの参加を得た。会期中の入館者数9,205名。

◆秋期特別展「地下の正倉院展―荷札木簡をひもとく―」

2018年10月14日～11月26日

平城宮・京跡出土木簡の実物展示をおこなう秋の特別展示。全国各地から平城宮跡を訪れてくださった皆さんに、木簡にもっと親しみをもってもらいたいという思いから、今年度は、全国津々浦々から送られた荷札木簡をご覧いただく展示を企画。本展と連携して平城宮いごない館でミニ展示もおこない、好評を得た。会期中の入館者数15,853名、ギャラリートークを3回実施（参加172名）

◆冬期企画展「発掘された平城2017・2018」

2019年2月2日～3月31日

これまで「発掘速報展」としておこなってきたもの。その年度の『奈良文化財研究所紀要』に掲載された都城発掘調査部（平城地区）のおもだった発掘調査の成果を展示公開する。2017年度には実施しなかったことから、2年度分のものとなった。これからは、個別の発掘調査の成果ばかりでなく、発掘調査に関わる最新の研究成果等もトピック的に取り上げたいと考えており、今回は、地震考古学に関わる展示をおこなった。会期中の入館者数11,725名、ギャラリートークを4回実施（参加119名）

このほか、新春ミニ展示として「平城京の亥」（2019年1月4日～1月27日 会期中入館者数4,576名）を開催した。

2018年度 入館者数

飛鳥資料館（有料）観覧料の詳細は69頁	平城宮跡資料館（無料）	合 計
29,276人	90,558人	119,834人

解説ボランティア事業

平城宮跡への来訪者に対して、平城宮跡への理解を深めていただけるよう案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業については、1999年10月から実施しているが、2018年1月より新たな制度のもとで、活動を開始した。

2019年3月31日現在、所定の研修を受けた解説ボランティアの登録数は156名を数え、定点6ヵ所の解説のほか事前予約による宮跡内ツアーガイドもおこなっている。



2018年度「平城宮跡解説ボランティア」の活動状況（活動日数302日間）

各定点において解説を受けた来訪者延べ人数								解説をした平城宮跡 解説ボランティアの 延べ人数
平城宮跡資料館	第一次大極殿	遺構展示館	朱雀門	東院庭園	ツアーガイド	平城宮 いざない館	計	
18,428人	24,486人	8,799人	21,133人	8,722人	5,978人	21,223人	108,769人	4,845人

*活動は、定点施設の休館日を除く毎日。

2019.3.31 現在

図書資料・データベースの公開

〈図書〉

図書資料室では、文化財資料の中核的な拠点となるべく、歴史・考古学分野をはじめ、幅広く文化財関係の資料を収集している。また、新庁舎図書資料室においても一般公開施設として公開し、より快適な環境下で所外の研究者および一般の方々々に図書・雑誌および展覧会カタログ等の閲覧・複写サービスをおこなっている。遠隔利用については、国立情報学研究所の提供するNACSIS-ILLを通じて図書の貸し出し、複写サービスをおこなっている。

また、奈文研の刊行物についても、主要なものについてはPDF化をおこない、学術情報リポジトリからインターネットを通じて公開している。

木簡データベースの後継である木簡庫の公開および、公開データベースのリニューアルをおこなう等により、公開データベースの利便性の向上と充実に力を入れている。

公開データベース一覧	2018年度 アクセス件数
木簡庫 (Wooden Tablet Database)	34,687
木簡庫 (Wooden Tablet Database) (韓国語版 한국어)	1,000
木簡庫 (Wooden Tablet Database) (中国語繁体字版 繁體中文)	34,778
木簡庫 (Wooden Tablet Database) (中国語简体字版 简体中文)	661
木簡庫 (Wooden Tablet Database) (英語版 English)	1,085
木簡庫 (Wooden Tablet Database) / 電子くずし辞書データベース連携検索	265,584
木簡・くずし辞書解読システム-MOJIZO-	1,176,512
全国木簡出土遺跡・報告書データベース	1,031
和同開珣出土遺跡データベース	279
平城京出土陶硯データベース	354
遺跡データベース	6,738
古代地方官衙関係遺跡データベース	1,931
古代寺院遺跡データベース	4,028
官衙関係遺跡整備データベース	370
古代地名検索システム	28,322
発掘庭園データベース	1,856
薬師寺典籍文書データベース	298
大官家文書データベース	249
所蔵図書データベース	68,354
報告書抄録データベース	4,726
全国遺跡報告総覧	11,175,466
考古関連雑誌論文情報補完データベース	5,939
遺跡報告内論考データベース	977
学術情報リポジトリ	54,298

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所 学報

- 第1冊 仏師運慶の研究 (1954)
 第2冊 修学院離宮の復原的研究 (1954)
 第3冊 文化史論叢 (1954)
 第4冊 奈良時代僧房の研究 (1957)
 第5冊 飛鳥寺発掘調査報告 (1958)
 第6冊 中世庭園文化史 (1959)
 第7冊 興福寺食堂発掘調査報告 (1959)
 第8冊 文化史論叢 I (1960)
 第9冊 川原寺発掘調査報告 (1960)
 第10冊 平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 (1961)
 第11冊 院の御所と御堂一院家建築の研究— (1962)
 第12冊 巧匠安阿弥陀仏快慶 (1962)
 第13冊 寝殿造系庭園の立地的考察 (1962)
 第14冊 唐招提寺蔵「レース」と「金亀舍利塔」に関する研究 (1962)
 第15冊 平城宮発掘調査報告 II
官衙地域の調査 (1962)
 第16冊 平城宮発掘調査報告 III
内裏地域の調査 (1963)
 第17冊 平城宮発掘調査報告 IV
官衙地域の調査 2 (1966)
 第18冊 小堀遠州の作事 (1966)
 第19冊 藤原氏の氏家とその院家 (1968)
 第20冊 名物裂の成立 (1970)
 第21冊 研究論集 I (1972)
 第22冊 研究論集 II (1974)
 第23冊 平城宮発掘調査報告 VI
平城京左京一条三坊の調査 (1975)
 第24冊 高山一町並調査報告— (1975)
 第25冊 平城京左京三条二坊 (1975)
 第26冊 平城宮発掘調査報告 VII
内裏北外郭の調査 (1976)
 第27冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 I (1976)
 第28冊 研究論集 III (1976)
 第29冊 木曾奈良井一町並調査報告— (1976)
 第30冊 五條一町並調査の記録— (1977)
 第31冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 II (1978)
 第32冊 研究論集 IV (1978)
 第33冊 イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告 (1978)
 第34冊 平城宮発掘調査報告 IX
宮城門・大垣の調査 (1978)
 第35冊 研究論集 V (1979)
 第36冊 平城宮整備調査報告 I (1979)
 第37冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 III (1980)
 第38冊 研究論集 VI (1980)
 第39冊 平城宮発掘調査報告 X
古墳時代 I (1981)
 第40冊 平城宮発掘調査報告 XI
第一次大極殿地域の調査 (1982)
 第41冊 研究論集 VII (1984)
 第42冊 平城宮発掘調査報告 XII
馬寮地域の調査 (1985)
 第43冊 日本における近世民家 (農家) の系統的発展 (1985)
 第44冊 平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告 (1986)
 第45冊 薬師寺発掘調査報告 (1987)
 第46冊 平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書 (1989)
 第47冊 研究論集 VIII (1989)
 第48冊 年輪に歴史を読む
—日本における古年輪学の成立— (1990)
 第49冊 研究論集 IX (1991)
 第50冊 平城宮発掘調査報告書 XIII
内裏の調査 II (1991)
 第51冊 平城宮発掘調査報告書 XIV
平城宮第二次大極殿院の調査 (1993)
 第52冊 西隆寺発掘調査報告書 (1993)
 第53冊 平城宮朱雀門の復原的研究 (1994)
 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊
—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告 (1995)
 第55冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV
—飛鳥水落遺跡の調査— (1995)
 第56冊 平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告 (1997)
 第57冊 日本の信仰遺跡 (1999)
 第58冊 研究論集 X (1999)
 第59冊 中世瓦の研究 (2000)
 第60冊 研究論集 XI (2000)
 第61冊 研究論集 XII (2001)
 第62冊 史跡頭塔発掘調査報告 (2001)
 第63冊 山田寺発掘調査報告 本文編
図版編 (2002)
 第64冊 研究論集 XIII
中国古代の葬玉 (2002)
 第65冊 文化財論叢 III 奈良文化財研究所

- 創立五十周年記念論文集 (2002)
- 第66冊 研究論集XV
東アジアの古代都城 (2003)
- 第67冊 平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
旧石器時代編 [法華寺南遺跡] (2003)
- 第68冊 吉備池廃寺発掘調査報告
百濟大寺跡の調査 (2003)
- 第69冊 平城宮発掘調査報告XV
東院庭園地区の調査 (2003)
- 第70冊 平城宮発掘調査報告XVI
兵部省地区の調査 (2005)
- 第71冊 飛鳥池遺跡発掘調査報告 I (2004)
- 第72冊 奈良山発掘調査報告 I
石のカラト古墳・音兼谷古墳の調査 (2005)
- 第73冊 タニ窯跡 A6号窯跡発掘調査報告 (2005)
- 第74冊 古代庭園研究 I (2005)
- 第75冊 研究論集 XV
中国古代の銅剣 (2006)
- 第76冊 法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告 (2007)
- 第77冊 日韓文化財論集 I (2008)
- 第78冊 近世瓦の研究 (2008)
- 第79冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 1
基壇・礎石 (2009)
- 第80冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 4
瓦・屋根 (2009)
- 第81冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 2
木部 (2010)
- 第82冊 平城宮第一次大極殿の復原に関する研究 3
彩色・金具 (2010)
- 第83冊 研究論集16
鉄製武器の流通と初期国家形成 (2010)
- 第84冊 平城宮発掘調査報告XVII
第一次大極殿院地区の調査 2 本文編/図版
編 (2011)
- 第85冊 漢長安城桂宮 報告編・論考編 (2011)
- 第86冊 研究論集17
平安時代庭園の研究—古代庭園研究 II—
(2011)
- 第87冊 日韓文化財論集 II (2011)
- 第88冊 西トップ遺跡調査報告
—アンコール文化遺産保護共同研究報告書—
(2011)
- 第89冊 四万十川流域 文化的景観研究 (2011)
- 第90冊 Western Prasat Top Site Survey Report
on Joint Research for the Protection of the
Angkor Historic Site (2012)

- 第91冊 遼寧省朝陽地区隋唐墓の整理と研究 (2012)
- 第92冊 文化財論叢IV 奈良文化財研究所 創立六十
周年記念論文集 (2012)
- 第93冊 奈良山発掘調査報告 II—歌姫西須恵器窯の調
査— (2014)
- 第94冊 飛鳥・藤原宮発掘調査報告 V—藤原京左京六
条三坊の調査— (2017)
- 第95冊 日韓文化財論集 III (2015)
- 第96冊 中世庭園の研究—鎌倉・室町時代— (2015)

奈良文化財研究所 史料

- 第1冊 南無阿弥陀仏作善集 (複製) (1955)
- 第2冊 西大寺叡尊伝記集成 (1956)
- 第3冊 仁和寺史料 寺誌編 I (1964)
- 第4冊 俊乗房重源伝記集成 (1965)
- 第5冊 平城宮木簡一 図版 (1966)
解説 (1969)
(平城宮発掘調査報告 V)
- 第6冊 仁和寺史料 寺誌編 2 (1968)
- 第7冊 唐招提寺史料第一 (1971)
- 第8冊 平城宮木簡二 図版 (1974) 解説 (1975)
(平城宮発掘調査報告 VIII)
- 第9冊 日本美術院彫刻等修理記録 I (1975)
- 第10冊 日本美術院彫刻等修理記録 II (1976)
- 第11冊 日本美術院彫刻等修理記録 III (1977)
- 第12冊 藤原宮木簡一 図版・解説 (1978)
- 第13冊 日本美術院彫刻等修理記録 IV (1978)
- 第14冊 日本美術院彫刻等修理記録 V (1979)
- 第15冊 東大寺文書目録第 1 巻 (1979)
- 第16冊 日本美術院彫刻等修理記録 VI (1979)
- 第17冊 平城宮木簡三 図版・解説 (1981)
- 第18冊 藤原宮木簡二 図版・解説 (1981)
- 第19冊 東大寺文書目録第 2 巻 (1981)
- 第20冊 日本美術院彫刻等修理記録 VII (1980)
- 第21冊 東大寺文書目録第 3 巻 (1981)
- 第22冊 七大寺巡礼私記 (1982)
- 第23冊 東大寺文書目録第 4 巻 (1982)
- 第24冊 東大寺文書目録第 5 巻 (1983)
- 第25冊 平城宮出土墨書土器集成 I (1983)
- 第26冊 東大寺文書目録第 6 巻 (1984)
- 第27冊 木器集成図録—近畿古代編— (1985)
- 第28冊 平城宮木簡四 図版・解説 (1986)
- 第29冊 興福寺典籍文書目録第 1 巻 (1986)
- 第30冊 山内清男考古資料 1 (1988)
- 第31冊 平城宮出土墨書土器集成 II (1988)
- 第32冊 山内清男考古資料 2 (1989)

- 第33冊 山内清男考古資料3 (1992)
 第34冊 山内清男考古資料4 (1992)
 第35冊 山内清男考古資料5 (1992)
 第36冊 木器集成図録—近畿原始編— (1993)
 第37冊 梵鐘実測図集成 (上) (1993)
 第38冊 梵鐘実測図集成 (下) (1993)
 第39冊 山内清男考古資料6 (1993)
 第40冊 山田寺出土建築部材集成 (1995)
 第41冊 平城京木簡一 図版・解説 (1995)
 第42冊 平城宮木簡五 図版・解説 (1996)
 第43冊 山内清男考古資料7 (1996)
 第44冊 興福寺典籍文書目録第2巻 (1996)
 第45冊 北浦定政関係資料 (1997)
 第46冊 山内清男考古資料8 (1997)
 第47冊 北魏洛陽永寧寺 (1998)
 第48冊 発掘庭園資料 (1998)
 第49冊 山内清男考古資料9 (1998)
 第50冊 山内清男考古資料10 (1999)
 第51冊 山内清男考古資料11 (2000)
 第52冊 地域文化財の保存修復 考え方と方法 (2000)
 第53冊 平城京木簡二 図版・解説 (2001)
 第54冊 山内清男考古資料12 (2000)
 第55冊 法隆寺古絵図集 (2001)
 第56冊 法隆寺考古資料 (2002)
 第57冊 日中古代都城図録 (2002)
 第58冊 山内清男考古資料13 (2002)
 第59冊 平城宮出土墨書土器集成Ⅲ (2003)
 第60冊 平城京条坊総合地図 (2003)
 第61冊 鞏義黄冶唐三彩 (2003)
 第62冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉一 (2003)
 第63冊 平城宮木簡六 図版・解説 (2004)
 第64冊 平城京出土古代官銭集成I (2004)
 第65冊 北浦定政関係資料
 松の落ち葉二 (2004)
 第66冊 山内清男考古資料14 (2004)
 第67冊 興福寺典籍文書目録第3巻 (2004)
 第68冊 古代東アジアの金属製容器I 中国編 (2004)
 第69冊 平城京漆紙文書 (一) (2005)
 第70冊 山内清男考古資料15 (2005)
 第71冊 古代東アジアの金属製容器2 朝鮮・日本編
 (2005)
 第72冊 畿内産土師器集成西日本編 (2005)
 第73冊 黄冶唐三彩窯の考古新発見 (2005)
 第74冊 山内清男考古資料16 (2006)
 第75冊 平城京木簡三 二条大路木簡1 (2006)
 第76冊 評制下荷札木簡集成 (2006)
 第77冊 平城京出土陶硯集成I (2006)
 第78冊 黒草紙・新黒双紙 (2007)
 第79冊 飛鳥藤原京木簡一 図版・解説 (2007)
 第80冊 平城京出土陶硯集成二 平城京・寺院 (2007)
 第81冊 高松塚古墳壁画フォトマップ資料 (2009)
 第82冊 飛鳥藤原京木簡二 図版・解説 (2009)
 第83冊 興福寺典籍文書目録 第四巻 (2009)
 第84冊 山内清男考古資料17 (2009)
 第85冊 平城宮木簡七 図版・解説 (2010)
 第86冊 キトラ古墳壁画フォトマップ資料 (2011)
 第87冊 明治時代平城宮跡保存運動史料集 (2011)
 第88冊 藤原宮木簡三 図版・解説 (2012)
 第89冊 仁和寺史料 古文書編一 (2013)
 第90冊 大宮家文書調査報告書 (2014)
 第91冊 藤原宮木簡四 図版・解説 (2019)
 第92冊 木器集成図録—飛鳥藤原編I— (2019)
 第93冊 薬師寺文書目録第1巻 (2019)
- 奈良文化財研究所 研究報告**
- 第1冊 文化的景観研究集会 (第1回) 報告書 (2009)
 第2冊 河南省鞏義市黄冶窯跡の発掘調査概要 (2010)
 第3冊 古代東アジアの造瓦技術 (2010)
 第4冊 古代官衙・集落研究会報告書「官衙と門」報告編/資料編 (2010)
 第5冊 文化的景観研究集会 (第2回) 報告書 (2010)
 第6冊 第14回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と鉄」(2011)
 第7冊 文化的景観研究集会 (第3回) 報告書 (2011)
 第8冊 鞏義白河窯の考古新発見 (2012)
 第9冊 第15回古代官衙・集落研究会報告書「四面廂建物を考える」報告編/資料編 (2012)
 第10冊 文化的景観研究集会 (第4回) 報告書 (2012)
 第11冊 河南省鞏義市白河窯跡の発掘調査 (2013)
 第12冊 第16回古代・官衙・集落研究会報告書「塩の生産・流通と官衙・集落」(2013)
 第13冊 文化的景観研究集会 (第5回) 報告書 (2013)
 第14冊 第17回古代官衙・集落研究会研究報告書「長舎と官衙の建物配置」報告編/資料編 (2014)
 第15冊 第18回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器1」(2015)
 第16冊 キトラ古墳天文図 星座写真資料 (2016)
 第17冊 藤原宮跡出土馬の研究 (2016)
 第18冊 第19回古代官衙・集落研究会報告書「官衙・集落と土器2」(2016)
 第19冊 第20回古代官衙・集落研究会報告書「郡庁

- 域の空間構成」(2017)
- 第20冊 第21回古代官衙・集落研究会報告書『地方官衙政庁域の変遷と特質』報告編／資料編(2018)
- 第21冊 デジタル技術による文化財情報の記録と活用(2019)
- 第22冊 ユーラシア考古学研究資料1『カザフスタン後期旧石器文化の研究』(2018)

奈良文化財研究所 基準資料

- 第1冊 瓦編1 解説(1974)
- 第2冊 瓦編2 解説(1975)
- 第3冊 瓦編3 解説(1976)
- 第4冊 瓦編4 解説(1977)
- 第5冊 瓦編5 解説(1977)
- 第6冊 瓦編6 解説(1979)
- 第7冊 瓦編7 解説(1980)
- 第8冊 瓦編8 解説(1981)
- 第9冊 瓦編9 解説(1984)

飛鳥資料館 図録

- 第1冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
- 第2冊 飛鳥白鳳の在銘金銅仏 銘文編(1977)
- 第3冊 日本古代の墓誌(1977)
- 第4冊 日本古代の墓誌 銘文編(1978)
- 第5冊 古代の誕生仏(1978)
- 第6冊 飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—(1979)
- 第7冊 日本古代の鴟尾(1980)
- 第8冊 山田寺展(1981)
- 第9冊 高松塚拾年(1982)
- 第10冊 渡来人の寺—桧隈寺と坂田寺—(1983)
- 第11冊 飛鳥の水時計(1983)
- 第12冊 小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—(1984)
- 第13冊 藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—(1984)
- 第14冊 日本と韓国の塑像(1985)
- 第15冊 飛鳥寺(1985)
- 第16冊 飛鳥の石造物(1986)
- 第17冊 萬葉乃衣食住(1987)
- 第18冊 壬申の乱(1987)
- 第19冊 古墳を科学する(1988)
- 第20冊 聖徳太子の世界(1988)
- 第21冊 仏舎利埋納(1989)
- 第22冊 法隆寺金堂壁画飛天(1989)
- 第23冊 日本書紀を掘る(1990)
- 第24冊 飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
- 第25冊 飛鳥の源流(1991)
- 第26冊 飛鳥の工房(1992)

- 第27冊 古代の形(1995)
- 第28冊 蘇我三代(1995)
- 第29冊 斉明紀(1996)
- 第30冊 遺跡を測る(1997)
- 第31冊 それからの飛鳥(1998)
- 第32冊 UTAMAKURA(1998)
- 第33冊 幻のおおでら—百済大寺(1998)
- 第34冊 鏡を作る 海獣葡萄鏡を中心として(1999)
- 第35冊 あすかの石造物(2000)
- 第36冊 飛鳥池遺跡(2000)
- 第37冊 遺跡を探る(2001)
- 第38冊 ‘あすか—以前’(2002)
- 第39冊 A0の記憶(2002)
- 第40冊 古年輪(2003)
- 第41冊 飛鳥の湯屋(2004)
- 第42冊 古代の梵鐘(2004)
- 第43冊 飛鳥の奥津城—キトラ・カラト・マルコ・高松塚(2005)
- 第44冊 東アジアの古代苑池(2005)
- 第45冊 キトラ古墳と発掘された壁画たち(2005)
- 第46冊 キトラ古墳壁画四神玄武(2006)
- 第47冊 奇偉莊嚴山田寺(2007)
- 第48冊 キトラ古墳壁画十二支—子・丑・寅—(2008)
- 第49冊 まぼろしの唐代精華—黄冶唐三彩窯の考古新発見—(2008)
- 第50冊 キトラ古墳壁画四神—青龍白虎—(2009)
- 第51冊 三燕文化の考古新発見—北方騎馬民族のかがやき—(2009)
- 第52冊 キトラ古墳壁画四神(2010)
- 第53冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち—(2010)
- 第54冊 星々と日月の考古学(2011)
- 第55冊 飛鳥遺珍—のこされた至宝たち—(2011)
- 第56冊 比羅夫がゆく—飛鳥時代の武器・武具・いくさ—(2012)
- 第57冊 花開く都城文化(2012)
- 第58冊 飛鳥寺2013(2013)
- 第59冊 飛鳥・藤原京への道(2013)
- 第60冊 いにしへの匠たち—ものづくりからみた飛鳥時代—(2014)
- 第61冊 はぎとり・きりとり・かたどり—大地にきざまれた記憶—(2014)
- 第62冊 はじまりの御仏たち(2015)
- 第63冊 キトラ古墳と天の科学(2015)
- 第64冊 文化財を撮る—写真が遺す歴史(2016)
- 第65冊 祈りをこめた小塔(2016)

- 第66冊 早川和子が描く飛鳥むかしむかし (2017)
 第67冊 藤原京を掘る—藤原京一等地の調査— (2017)
 第68冊 高松塚古墳を掘る—解明された築造方法— (2017)
 第69冊 あすかの原風景 (2018)
 第70冊 よみがえる飛鳥の工房—日韓の技術交流を探る— (2018)
 第71冊 骨ものがたり—環境考古学研究室のお仕事— (2019)

飛鳥資料館 カタログ

- 第1冊 仏教伝来飛鳥への道 (1975)
 第2冊 飛鳥の寺院遺跡1—最近の出土品 (1975)
 第3冊 飛鳥の仏像 (1978)
 第4冊 桜井の仏像 (1979)
 第5冊 高取の仏像 (1980)
 第6冊 檀原の仏像 (1981)
 第7冊 飛鳥の王陵 (1982)
 第8冊 大官大寺—飛鳥最大の寺— (1985)
 第9冊 高松塚の新研究 (1992)
 第10冊 飛鳥の一と—最近の調査から— (1994)
 第11冊 山田寺 (1996)
 第12冊 山田寺東回廊再現 (1997)
 第13冊 飛鳥のイメージ (2001)
 第14冊 古墳を飾る (2005)
 第15冊 うずもれた古文書—みやこの漆紙文書の世界— (2006)
 第16冊 飛鳥の金工海獣葡萄鏡の諸相 (2006)
 第17冊 飛鳥の考古学2006 (2007)
 第18冊 「とき」を撮す—発掘調査と写真— (2007)
 第19冊 飛鳥の考古学2007 (2008)
 第20冊 飛鳥の考古学2008 (2009)
 第21冊 飛鳥の考古学2009 (2010)
 第22冊 小さな石器の大きな物語 (2010)
 第24冊 木簡黎明—飛鳥に集ういにしへの文字たち— (2010)
 第24冊 飛鳥の考古学2010 (2011)
 第25冊 鑄造技術の考古学—東アジアにひろがる鑄物師のわざ— (2011)
 第26冊 飛鳥の考古学2011 (2012)
 第27冊 飛鳥の考古学2012 (2013)
 第28冊 飛鳥・藤原京を考古科学する (2013)
 第29冊 キトラ古墳壁画発見30周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍 (2014)
 第30冊 飛鳥の考古学2013 (2014)
 第31冊 大和の美仏に魅せられて (2014)
 第32冊 飛鳥の考古学2014 (2014)
 第33冊 飛鳥の考古学2015 (2015)
 第34冊 飛鳥の考古学2017 (2018)

その他の刊行物 (2018年度)

- ・奈良文化財研究所紀要2018
- ・奈文研ニュースNo.69～72
- ・埋蔵文化財ニュースNo.174～177
- ・『飛鳥・藤原京を読み解く 古代国家誕生の軌跡』
- ・『デジタル技術で魅せる文化財—奈文研とICT—』
- ・『平成30年度平城宮跡資料館夏のこども展示「たいけん!なぶんけんノート」』(平城宮跡資料館企画展)
- ・『奈良文化財研究所本庁舎建設のあゆみ 平城京右京一条二坊・二条二坊・一条南大路・西一坊大路の調査』
- ・『奈文研の地下に眠る遺構 平城京右京一条二坊・二条二坊・一条南大路・西一坊大路の調査』
- ・『奈文研本庁舎敷地の遺構表示』
- ・『同位体比分析と産地推定に関する最近の動向』
- ・『地下の正倉院展—荷札木簡をひもとく—』(平城宮跡資料館企画展)
- ・『官衙・集落と大甕』第22回古代官衙・集落研究会研究報告資料』
- ・『甕据付建物遺構集成』第22回古代官衙・集落研究会』
- ・『史跡等を活かした地域づくり・観光振興 平成29年度遺跡整備・活用研究集会報告書』
- ・『8世紀の瓦づくりⅧ一本づくり・一枚づくりの展開2』発表要旨 第19回シンポジウム
- ・『8世紀の瓦づくりⅧ一本づくり・一枚づくりの展開2』資料編(西日本編) 第19回シンポジウム
- ・『発掘調査報告書総目録 高知県編』
- ・『発掘調査報告書総目録 島根県編』
- ・『発掘調査報告書総目録 新潟県編』
- ・『遺跡情報交換標準の研究第5版』
- ・『文化的景観研究集会(第9回)報告書 地域らしさを支える土木—文化的景観における公共事業の整え方—』
- ・『奈良時代鉛釉陶器および鉛釉瓦磚の基礎的研究』
- ・『東アジア旧石器・新石器移行期の基礎的研究—河南霊井遺跡出土品の徹底分析—』

人事異動 (2018. 4. 1~2019. 3. 31)

●2018年4月1日付

・新規採用

企画調整部写真室 飯田ゆりあ
 都城発掘調査部考古第一研究室研究員 松永 悦枝
 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室研究員 村田 泰輔
 都城発掘調査部考古第一研究室アソシエイトフェロー 片山健太郎
 都城発掘調査部考古第三研究室アソシエイトフェロー 道上 祥武
 都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー 目黒 新悟
 都城発掘調査部遺構研究室アソシエイトフェロー 李 暉

・採用(転入)

研究支援推進部長 (防衛省沖縄防衛局企画部次長)城田 由二
 研究支援推進部総務課長
 (奈良先端科学技術大学院大学監査室室長補佐)津寄 憲治
 研究支援推進部研究支援課長
 (滋賀大学施設管理課副課長)菊本 恵二
 研究支援推進部連携推進課課長補佐(兼)同課広報企画係長
 (大阪大学国際教育共通事務室室長補佐(兼)同室国際教育交流センター係長)
 溝端 靖秀
 研究支援推進部総務課財務係主任
 (京都大学吉田南構内共通事務部経理課経理掛主任)綱島 恵

・採用(配置換)

都城発掘調査部考古第二研究室アソシエイトフェロー 土橋明梨紗

・配置換

文化遺産部景観研究室長 (文化遺産部主任研究員)中島 義晴
 都城発掘調査部史料研究室長 (都城発掘調査部主任研究員)馬場 基

・配置換(転出)

奈良国立博物館総務課長 (研究支援推進部総務課長)臣守 常勝

・昇任

研究支援推進部総務課財務係長
 (研究支援推進部総務課財務係主任)松本 直也
 埋蔵文化財センター主任研究員
 (埋蔵文化財センター年代学研究室研究員)星野 安治

・再雇用

研究支援推進部連携推進課経営戦略係 石田 義則
 研究支援推進部研究支援課宮跡等活用支援係 今西 康益
 企画調整部国際遺跡研究室特任研究員 杉山 洋
 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室特任研究員 小池 伸彦

・兼務免

文化遺産部景観研究室長 (文化遺産部長)島田 敏男

都城発掘調査部史料研究室長

(副所長(兼)都城発掘調査部副部长)渡邊 晃宏

●2018年5月31日付

・辞職(転出)

文化庁文化財部参事官(建造物担当)文化財調査官(伝統的建造物部門)
 (都城発掘調査部主任研究員)西山 和宏

●2018年7月1日付

・新規採用

飛鳥資料館学芸室アソシエイトフェロー 荻山 琴美

●2018年9月30日付

・辞職

都城発掘調査部遺構研究室研究員 海野 聡
 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室アソシエイトフェロー 山口 欧志

●2018年10月1日付

・新規採用

埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室研究員 山口 欧志

●2019年1月1日付

・新規採用

都城発掘調査部史料研究室アソシエイトフェロー 畑野 吉則

●2019年3月31日付

・定年退職

企画調整部長(兼)同部文化財情報研究室長(兼)同部国際遺跡研究室長(兼)同部写真室長 森本 晋
 研究支援推進部連携推進課課長補佐(兼)同課文化財情報係長 渡 勝弥
 研究支援推進部連携推進課課長補佐 松本 正典

・辞職(転出)

文化庁国語課日本語教育専門官
 (研究支援推進部連携推進課長) 津田 保行

・配置換(4月1日付)

奈良国立博物館総務課環境整備係長
 (研究支援推進部研究支援課専門職員) 西田 功

・任期満了退職

企画調整部展示企画室アソシエイトフェロー 田中 恵美
 文化遺産部景観研究室アソシエイトフェロー 本間 智希
 文化遺産部遺跡整備研究室アソシエイトフェロー マレス・エマニュエル
 埋蔵文化財センター保存修復科学研究室アソシエイトフェロー(兼)飛鳥資料館学芸室 金 旻貞

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2018年度	2019年度（予算額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	920,446	723,395
施設整備費	116,166	0
自己収入（入場料等）	59,365	52,143
計	1,095,977	775,538

土地と建物

単位：㎡

	土地	建物（建面積/延面積）	建築年
本庁舎地区	8,878.94	2,812.45/11,387.06	2018年
平城宮跡地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
藤原地区	20,515.03	6,016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥地区	17,092.93	2,657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費助成事業（2019年4月12日現在）

単位：千円

研究種目	2018年度				（参考）2019年度			
	①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金		①科学研究費補助金		②学術研究助成基金助成金	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（S）	1	19,760	-	-	1	24,960	-	-
基盤研究（A）	2	17,680	-	-	2	22,880	-	-
基盤研究（B）	7	20,474	1（1）	-	6	21,450	1	-
基盤研究（C）	-	-	21	25,082	-	-	20	20,085
国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))			1	3,640			1	3,640
挑戦的研究（開拓）	2	14,690	-	-	2	7,020	-	-
挑戦的研究（萌芽）	-	-	2	3,717	-	-	-	-
挑戦的萌芽研究	-	-	1	1,040	-	-	-	-
若手研究（A）	4	20,280	-	-	4	15,080	-	-
若手研究（B）	-	-	16	13,000	-	-	10	5,850
若手研究	-	-	4	5,720	-	-	7	8,320
研究活動スタート支援	1	1,300	-	-	-	-	1	1,170
新学術領域研究（研究領域提案型）公募研究	1	2,470	-	-	1	3,900	-	-
特別研究員奨励費	1	1,040			-	-		

※同一の研究課題で①と②の両方が交付されるもの（一部基金分）の件数はそれぞれに含み、②の括弧書きは共通するものの内数である。

受託調査研究

単位：千円

区分	2017年度		2018年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	26	253,015	28	304,340
発掘	9	32,862	9	21,745
計	35	285,877	37	326,085

研究助成金

単位：千円

研究助成金	2017年度		2018年度	
	件数	金額	件数	金額
	7	15,150	11	12,210

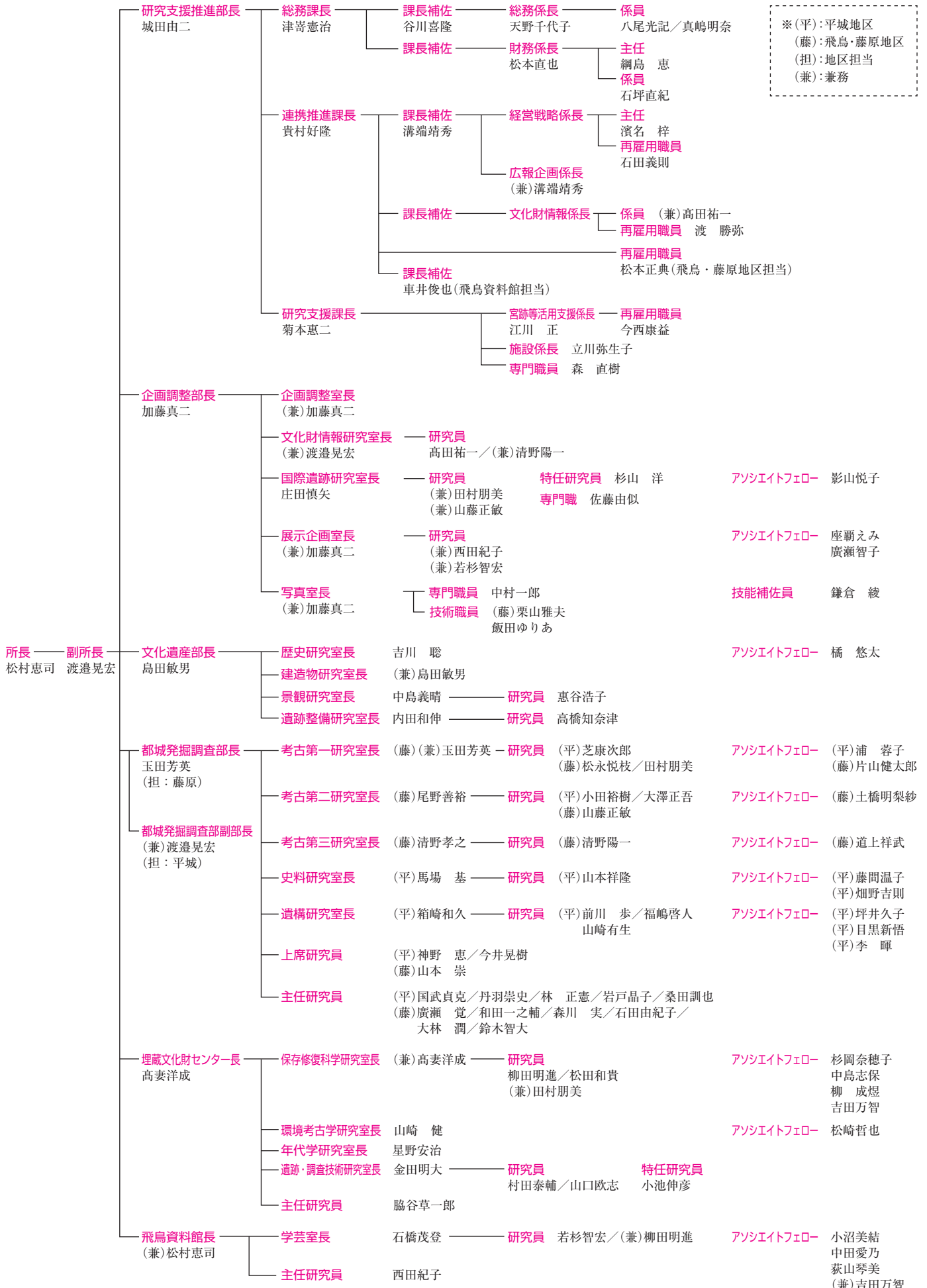
※採択年による集計

※2ヵ年にわたる場合は初年度に計上

職員一覧

2019年4月1日現在

※(平):平城地区
(藤):飛鳥・藤原地区
(担):地区担当
(兼):兼務



2019年4月1日現在

客員研究員一覧

平成31年度客員研究員名簿

所 属	氏 名
研究支援推進部	渡 辺 伸 行
企画調整部 (企画調整室)	羽 生 淳 子
企画調整部 (文化財情報研究室)	小 林 謙 一
企画調整部 (国際遺跡研究室)	森 本 晋
文化遺産部 (歴史研究室)	綾 村 宏
文化遺産部 (歴史研究室)	山 田 徹
文化遺産部 (建造物研究室)	林 良 彦
文化遺産部 (遺跡整備研究室)	EDWARDS Walter Drew
文化遺産部 (遺跡整備研究室)	小 野 健 吉
都城発掘調査部 (平城・考古第二研究室)	青 木 敬
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	黒 田 洋 子
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	杉 本 一 樹
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	館 野 和 己
都城発掘調査部 (平城・史料研究室)	方 国 花
都城発掘調査部 (平城・遺構研究室)	大 橋 正 浩
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	諫 早 直 人
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	上 原 眞 人
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	黒 羽 亮 太
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	竹 内 亮
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	巽 淳一郎
都城発掘調査部 (飛鳥・藤原)	深 澤 芳 樹
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	青 木 政 幸
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	大 賀 克 彦
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	小 椋 大 輔
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	北 田 正 弘
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	金 旻 貞
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	肥 塚 隆 保
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	澤 田 正 昭
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	辻 本 與志一
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	難 波 洋 三
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	浜 田 拓 志
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	福 永 香
埋蔵文化財センター (保存修復科学研究室)	三 村 衛
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	上 中 央 子
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	大 江 文 雄
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	菊 地 大 樹
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	茂 原 信 生
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	中 橋 孝 博
埋蔵文化財センター (環境考古学研究室)	丸 山 真 史
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	伊 東 隆 夫
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	児 島 大 輔
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	藤 井 裕 之
埋蔵文化財センター (年代学研究室)	光 谷 拓 実
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	赤 司 善 彦
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	小 澤 毅
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	狭 川 真 一
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	中 村 亜希子
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	西 口 和 彦
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	西 村 康
埋蔵文化財センター (遺跡・調査技術研究室)	野 口 淳